

多摩川における川魚漁のあゆみと遊漁(釣等)

2000年

笹川 耕太郎

東京都立田園調布高等学校教諭

目 次

1. はじめに	1
2. 激減する伝統的な漁法	2
イ. 川魚は農村の蛋白源	2
ロ. 投網と船頭	2
ハ. アユを求めて他県の河川へ	3
ニ. 仲間で行う投網	4
ホ. 仕事の合間を見て投網	5
ヘ. 四手網	5
ト. かわる生態系	6
チ. 中原の川漁師の生活歴	7
リ. 多摩川ガス橋	8
3. 貸ボート	10
イ. 河原のにぎわい	10
ロ. 今も残る屋形船	12
ハ. 客を選別する貸ボート店	14
ニ. 東急電鉄と催し物	16
ホ. 改善された自然環境	18
ヘ. 増水に備えて	19
ト. 最下流の貸ボート店	20
チ. ボートの建造	21
4. 釣人の調査	22
5. まとめ	25
資料編 現在の多摩川の姿 (写真集)	27

1 はじめに

東京にある二大河川の多摩川と荒川を比べると、多摩川は河川勾配がきつく、砂利が多い河川である。川の漁を比べてみると、荒川中下流の漁の中心はウナギやコイを捕る漁法であるが、多摩川中下流ではアユなどを対象とした漁法が発達した。多摩川で見られた漁法の中で比較的最近まで残っていたものを調査したい。漁法の特徴や、それを扱う漁師の技を調べながら、多摩川の自然環境の特徴やその恵みについて学ぶ。多摩川に生きる人々の営みを通じて、多摩川の水質汚染などによる影響を考えたい。今ある多摩川の姿は、周りの社会とともに変化してきたことを具体的に明らかにしたい。

多摩川の特徴や、数多くある堰などの構造物の存在は、大きな船の航行を許さなかった。結果として貸ボート店が比較的存在する河川となった。60年代後半にタンカー船が活躍した荒川と比べるとそれは歴然とする。貸ボート店を中心に河原でのレクリエーションのあゆみを調べる。貸ボート店は川に一番近い存在なので、河川の変化の影響をまともに受けやすい。調査を通じて河川の実態に迫る。

中高校生は釣に大層に興味を持っている。多摩川で盛んな釣を調査しながら、多摩川への興味、河川の自然環境の問題、人々の暮らしについて考えるきっかけにしたい。

研究の成果を、自然環境の問題や、河川やその周りに生きる人々を考える教材として取り上げるにより、理解しやすく興味を持てるようなものにしたい。

2 激減する伝統的な漁法

イ 川魚は農村の蛋白源であった

多摩川原橋から多摩川水道橋の水面を管理する川崎市の稲田漁協には、レクリエーションではあるけれども、今でも20名程の人が漁をしている。

多摩川では原則的に夜の漁は禁止されていた。冬は深場でコイを投網で狙い、4月になると産卵にやって来るウグイ（オイカワ）を瀬で一網打尽にした。ウグイは塩焼きや甘露煮にして食べた。6月になると登ってきたアユを捕った。アユは瀬にいるものを狙った。アユは10月15日から11月15日まで産卵のシーズンを迎えるために禁漁になる。40年前に四国のヤガラブチという投網の方法を導入したが、今では誰もその方法で投網ができなくなった。体を捻って投網を打つ方法だけが残っている。漁業権を持つ組合員は、節目の行事として漁を行っている。

かつて農村の重要な蛋白源は川魚であった。農家の人達は増水すると、大きな網を持って河原にやってきた。川の際に立って網を掬うだけで、面白いように様々な魚が捕れた。子供達は、餌としてミミズを仕込んだ。8本程のハリスを付けた7～8メートルのミチイトを、両端に石を結んで川に投げ入れて夕刻に流しておいた。朝一番にトビクチを使って引き上げ、ウナギやナマズを釣った。それはナガシバリという漁法であった。釣った魚は調布の料亭に売りに行って子供達の小遣い銭になった。春から秋には夜行性のウナギを捕るためにウナギドウ（筒）を仕掛けた。ウナギドウは人工的に流れを変えて仕掛けるより、自然の流れの中に置いた方がよく捕れた。戦後しばらくは大きな網を絞ってゆき、最後に投網を打つ大規模な漁法も見られた。

ロ 投網と船頭

投網の船を漕ぐ船頭は操作が難しいので、川崎市稲田漁協には4人程しかいなかった。網を打った後に船が乗り上げると、網を切った上に魚を逃してしまう。川崎市稲田でリョウセンと呼ばれていた漁船は、調布市和泉ではリョウセンボと呼び、主には投網の時に使った。オモテにある踊り場に網師が載り網を打つ。以前はもっと長い漁船が中心であった。投網は流れの強い瀬で打った。網を持って漁を行う時は、網師と船頭の呼吸が大切である。網師がオモテに網を抱えて立ち、その腕が右に少し動けば棹を使って船を右に進め、左に動けば左に進めた。網を打ち終えると船頭は棹を逆に差して船を反転させた。それでも投網を引く時に前進する力が働くので船は停止した。船は稲城市東長沼の4人の船大工が建造した。

調布市和泉の漁師の中には、夏に投網を行い、冬場は猟を行う人もいた。その地先の多摩川の河原には、砂利取りの穴が多くあり、そこが池になり冬鳥の渡来地となったからだ。アユは6月1日から10月15日が漁期である。1950年頃までは6月1日12時になると花火を上げて解禁を知らせた。アユの他・ハヤ・ヤマベ・コイ・クチボソなどを捕り、調布市和泉や川

崎市登戸の料亭や小売店に卸した。

漁師は投網を30反程は所有していた。コイ用の網は粗く太い糸で編み、クチボソなどは細かい目の網を使用した。アユも6月から8月はメセキで15~16メの細かい網を、8月後半になると10メの粗い網を使用した。

たいていの川魚漁師は、6年間程、父の投網を見ながら学んだ。投網の時は水深30センチ程（膝の深さ）地点で、背中から風を受けて3メートル先の魚を狙い、直径が2尋半の網を打った。アユは石についたコケを食べているので縄張り争いが厳しい。大漁の時は1回の網で10~15匹のアユが掛かるが、たいていは2~5匹程である。65年以降になると、多摩川も汚れて相模川に常連の客と投網を打ちに行くようになった。

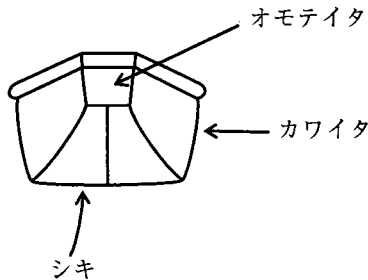
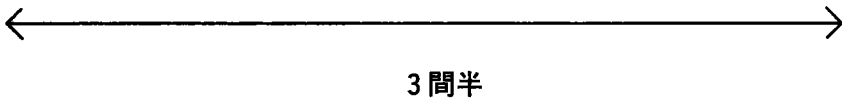
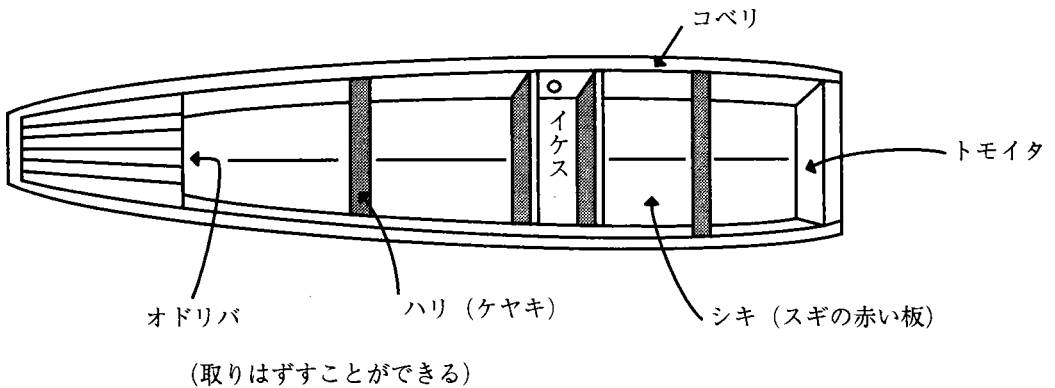


図1 川の漁船

ハ アユを求めて他県の河川へ

二子橋の北詰には高田屋・柳屋・富士観光など10軒の料亭があり、屋形船を出して客を楽しませていた。川向こうの二子新地には今でも数軒の料亭があり、芸者もいるようだ。二子の漁師は投網を使って、夏場はアユを専門的に取っては料亭に納めていた。1950年代には、形が揃った魚を要求されるようになり、4名の仲間と静岡県下田市、松崎町へ出掛けた。60年代に東名高速自動車道が完成してからは、天竜川や富士川などへ自動車にクーラーを積んで捕りに行った。春や秋・冬にはヤマメ・イワナなどを捕獲する目的で出掛けた。70年代以降は職場の仲間の故郷である福島県や新潟県佐渡島まで行き、生虫を餌にイワナを捕る釣もした。佐渡の人達は海の魚はよく食していたが、イワナには興味を示していなかったため、魚影が濃かった。92年の68才の時までアユを求めて地方へ行った。当初は土曜の夕方出発して、日曜日の夜に帰ってきた。最後の頃は自由になる休暇を利用して行くようになった。

料亭がなくなってからは夏に捕っておいた冷凍庫に保存しておき、年暮れに戻して甘露煮を作り、お歳暮として親戚や、お得意の客に（正業として大工をやっていた）配った。最後の頃には客の方から催促されるようになった。

二 仲間で行う投網

アユの投網を船で打つ場合は、トモ（船尾）側の人が網を打つと逃げる魚がいるので、それを狙ってオモテ（船首）の人が遅れて網を投げた。川の中を歩いて網を打つ場合も、たいていは二人一組で行動する。アユは昼間はワンド（深場）にいて、夜間には浅瀬に出て来るので、他の地域へ行く時には夜間に漁を行った。入漁料は山梨県の河川で年間5万円にまで値上がりしたが、当初は3千円と安かった（多摩川の場合は3千円）。川に入る時には上流側から、下流側から入るとフカンド（淵、深場）に嵌まって、川に押し流されることがあるからだ。危険な場所に入って命を落とした者もいる。昔は雷雨があって、30分～1時間経って水位が増えたが、コンクリート護岸が整備されて直ぐに水嵩が増えるようになった。

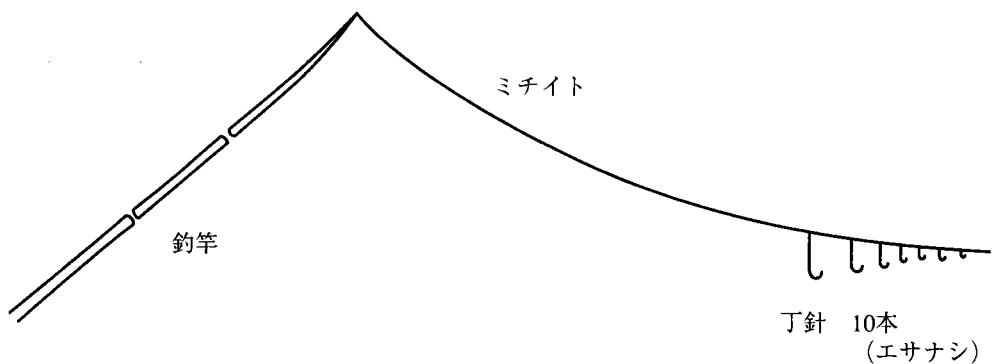


図2 コロガシ

多摩川では、6月の第1週はコロガシという漁法のアユ漁が解禁になる。釣竿にミチイトを付けて餌なしの丁針を10本程を仕掛けて流す漁法である。それは体を動かさない釣なので、体が冷えて体力勝負の漁であった。6月の第2週目に投網漁が解禁となり、10月の産卵の時期を除いて、11月の落アユの時期まで多摩川の漁は続く。12月になるとサケ・マスの漁も始まる。サケ・マスは収穫すると砧の水産試験場へ持って行く。

ホ 仕事の合間を見て投網

多摩川漁協等々力支部には30人程の投網を打つ漁師がいた。漁師は6人程で仲間を作っていた。それぞれ板金業、水道配管業、商店主などの仕事の本業である。船で漁をする場合は3人で船に乗り込む。船頭の船の操り方が悪いと投網を打つ人間は川に振り落とされた。川崎側に一人で船を操り投網をする器用な人がいた。漁師は多摩川のフカンドや浅瀬がよく分かっていた。

船は家大工の人が貸ボートのある河原で、見よう見まねで建造していた。腕は確かで材料も家から持ってきた。漁家には棹に使う竹竿が数本程用意されていた。5メートルほどの竹を購入して、75ミリ鉄板を矢印形に切ってもらい。竹に筋目を入れて鉄を突っ込み、予め鉄パイプ切ってつくった輪で固定した。そうすると竹竿は水に入れても浮かず、扱いやすくなった。竹竿は2年も使っていると、使い物にならなくなった。

網は10マル（メセキで10の結び）のものを使用した。冬場、テグスを購入して自分で編み上げた。今では20反程の投網を所有している。投網は6畳から10畳の大きさに広がる。川によって投網も異なっていた。天竜川や山梨県の河川で使う網は細かな糸で目を荒くして編んだ。多摩川や相模川で使用する網は、太い糸で細かく編んだものを使用した。投網の練習は、水桶に網を漬けて重くしたものを河原で打って練習すると上達した。アユを主に狙う投網であるから、体を捻って反動で遠くへ大きく広げて飛ばす方法を使った。クチボソ等は1年中捕って餌として販売した。

70年代に多摩川は汚れた。以後良くなったが、93年頃から汚れが目立ってきた。多摩川のアユは93年頃から、冷蔵庫に1週間程入れておくと香りが消えてしまうようになった。

ヘ 四手網

今では1年中、コイやヘラブナが釣れるようになったが、それは1958年（昭和33年）以降の放流の成果であって、以前は投網を使って1週間に1匹のコイが採れるかどうかであった。採った人がいようものなら皆がつかまえてどこで採ったのか執拗に質問した。しかしコイを釣った者も心得ていて、適当な答えをするだけであった。1950（昭和25）年頃はコイの価格は1本200円であった。魚価が高いことも釣りのポイントを知りたかった大きな理由の一つだ。

現在、多摩川漁業協同組合大田支部には21人の組合員がいるが、ほとんどがレクリエーションで漁をやっている人ばかりである。それも先代からの漁業権を放棄できずに今も持ち続

けている。H氏は1955（昭和30）年頃までは中原街道に面した場所で釣り堀や食堂を営みながら川魚漁・貸ボート業にと忙しく働いていた。体調を崩してからは川魚漁と貸ボート業に専念するようになった。多摩川といえばシラウオが有名で、漁獲した魚は多摩川べりの待ち合い、料理店に収めていた。川崎市新丸子に数軒の店があり、沼部には松の茶屋があった。冬から5月末まで船に三脚を組み、そこから四手網を上下させた昼間の漁である。山水（台地の中を染み通ってきた水）が豊富で、多摩川の中でもその水が噴き上げていた。そこがシラウオの漁場で、サツキが咲く頃が産卵の季節であった。体長は7～8センチで大漁の時は築地市場へも出荷した。透明の魚なのでその名がついたが、シロウオとは違う魚だ。

天然ウナギも四手網で取った。3月～12月の漁で、対象になったウナギは地ウナギである（海に戻らないウナギ）。漁場になった場所は川底が砂利場で、水が綺麗で平になった場所である。ウナギは川底に帯をなして生息していたから、大漁の時は1日に5百も収穫した。料理は蒲焼きが一番だった。1955（昭和30）年頃、大きなウナギを取ると野沢スレートの社長や渋谷秀雄（田園都市株式会社社長）氏、画家の猪熊弦一郎氏の家に届けると3本千円で売れた。全ての物価が10円単位であった時代のことだ。ウナギ、川海老、モズクガニなど多摩川の川底に生活していた生物は、動きが鈍いので汚染に弱い、さらに川の汚染は川底から進むものだから一番最初に姿を消していった。マンション、合成洗剤などによって河川は汚れ、60年代になると数多くいた水鳥は完全に姿を消してしまった。

ト かわる生態系

現在は多摩川に多数の魚が戻ってきたが、多摩川における生態系は大きく変化した。自家用に食べた川ドジョウはすっかり姿を消した。それは体に縞模様が入っていて柳の葉ほどの大きさだったのでヤナギハドジョウとも呼ばれていた。ギバチ（ナマズ科）やヤツメウナギなども多摩川の名物であったが壊滅状態だ。大陸から入ってきたライギョも姿を消した。

替わって85年頃からブラックバスやブルーギルが増えた。60才以上の人なら多摩川のマルタの味を覚えている。現在では誰もマルタを釣らないものだから相当の資源量になっている。毎日飛んでくるウがマルタを食べているので、その存在が確認できる。水の通りの良い流れの早い箇所を好むので、マルタの漁では7メートル四方の四手網が使われた。マルタは一年中、多摩川で活動しているが、ナツマルタとアキマルタは青臭くて食べられない。5月までのハルマルタは旨い味の魚だった。小骨が多いので料理には手間がかかる。軽く焼いて干し、レンタンの七輪に鍋を掛け、その中に水とお茶柄とマルタを入れて35分～40分間煮る。その後で、鍋に5匹ほどの前処理したマルタを入れて、薄口醤油と砂糖を加えて丸1日ほど弱火で煮詰めて自慢のマルタ料理を完成した。マルタは沼部では川に潮が入るので1匹10円で売買されたが、登戸まで上がると清流となり、潮が抜けて1匹当りの価格が15円に跳ね上がった。マルタは蒲鉾の原料になったこともあった。

川海老は今でも楽しみにしている人が多い。それらは居酒屋に卸される他に自宅で食べる人も多い。ブラックバスの餌食にもなっている。

アユの漁は遡上検査が終わる6月1日から9月30日が漁期になる。たいていは調布堰からガス橋の間が漁場であったが、7、8月頃になると二子橋まで上がって取りに行った。6月から8月、ホタルが川面を飛び交っていたので釣り船を雇い上げて料理人と客2、3人でテンプラなどを食べる優雅な遊びもあった。沼部には水神講があって川の安全や豊漁を祈ったが今は廃れてしまった。沼部には3軒の船大工があって川筋のスギを使って船を作っていた。

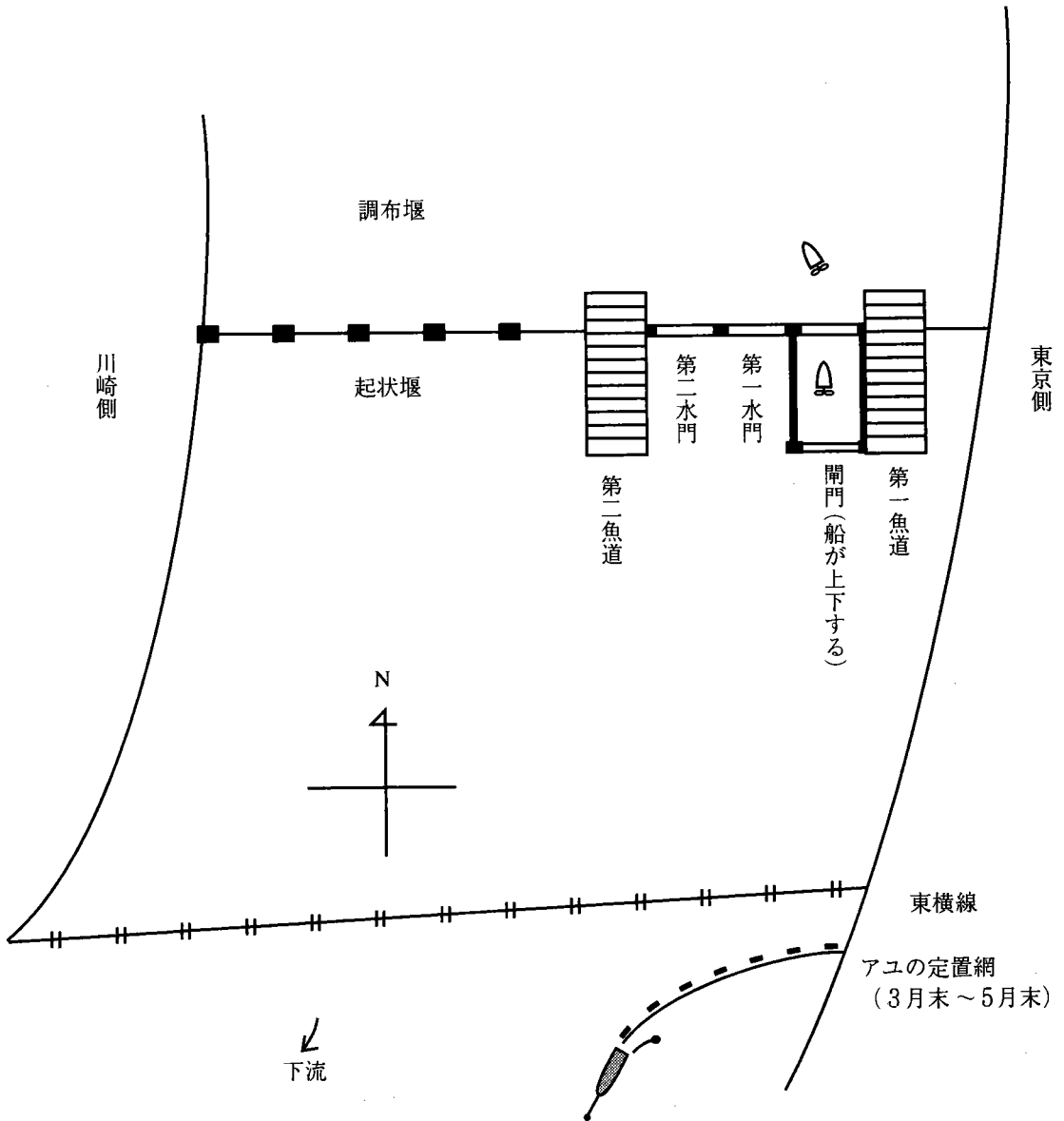


図3 アユ漁場

チ 中原の川漁師の生活暦

川崎市側には7百名程の漁業権を持つ人達がいる。登戸、二子、菅などの地域に分かれて、漁協を構成している。中原地区には50人程の漁業権を持つ人がいて、上丸子や中丸子で活躍している（今でも河原に船をおいて羽田沖にアサリなどをとりに行く人もいる）。川の漁は変動が大きい。とりわけ小さな川ほどそれが著しい。川で生活した人達は、半農半漁といった生活をしてきた。

川の漁の中で一番の稼ぎ頭はシラウオ漁であった。その魚は12月から3月に多摩川で漁獲された。投網や地引き網で魚を狙った。地引き網は上げ潮に乗ってやってくる魚を狙うもので、東中原、山王町の漁師9人が仲間をつくって行っていた。丈が1メートル50センチ程の網の上部を桐の浮きで持ち上げ、網の下部には鉛の沈子を結んで沈めた。砂利業者の多くの仲間も漁師であった。

戦後はボラやマルタも食料として喜ばれ、10貫目程にままとると、羽田の5～6軒の蒲鉾製造業者がオート三輪で買い上げにきた。戦後しばらくヘッツイの生活が続いたから、母親などは落ち葉拾いに周りの林に出かけた。だから洪水の後の河原は格好の燃料用に、流れてきた材木を拾う回収場所であった。

春から夏にかけてはアユを狙う。夏はスズキ、ハゼ、テナガエビなどを採った。9月になると落アユをとる（落アユがアユ漁の中心。大きな魚が網に入った）。アユは二子橋周辺で産卵してそれが孵って海に向かい、成魚の4、5分の大きさになって戻ってきた。さらに上流に向かって行き、大きくなり落鮎となって下る。

コイは滅多に収穫がなかったから、捕れても隠していた。肝も生き血も漢方として利用されていたから。コイやウナギは生きたものしか食べなかった。アユは丸子橋周辺で採れたものは内臓に砂が入っていた。

漁船は稲城市の久保井氏に作ってもらった。吃水の浅い船だ。船大工は各橋ごとにいた。丸子橋の荻野、多摩川大橋の鈴木・金子、ガス橋の水島、二子橋の野毛などが船大工だ。漁船は浅い所へも上がれるように3尺の幅のシキは波打っていた。真ん中の部分は流れを抱え込んで万が一浅瀬に乗り上げても這い出るような工夫がされていた。トモの部分は垂れていたが、それは船が左右に振れないように安定性を出すための工夫であった。船は同じような形の船でも上流で活躍する船は軽く作り、海で使う船は重く作った。9掛けといい船幅の9割が船尾の幅になるように作った。フナオロシ（進水式）はオーナーの差配で行われていた。普通の家建前より賑やかにやったフナオロシもあった。

リ 多摩川ガス橋

多摩川（東京側）の調布堰からガス橋は多摩川漁業協同組合の第7支部が漁業権を持っていて、20人程の組合員が参加している。3月下旬の天気の良い日に、調布堰の下手に定置網を仕掛け、5月まで設置しておき、取れた稚魚をダムの上流に流してやる。1日5百匹以上の魚が取れた場合は、超過分を登戸まで持って行って放流する。

現在も川に泊めた漁船で活躍する漁師は、目の間隔が13ミリ～50ミリ（3倍は広がる）の大きさの網を使って、東京湾のクロダイ、フッコなどを狙っている。冬場はメバル、アイナメなどを扇島、本牧の沖合で投網で採る。4月～9月には羽田沖でアサリのカイマキをやっている。採ったアサリは長男の店のみそ汁になったり、近所に配っている。本格的な漁をしていたのは1953（昭和28）年頃までだ。漁師は河原から7分程の大田区久が原に住んでいる。

最盛期の時にはシラウオも投網で捕った。右岸の採石した穴と左岸に寄って流れる水路があって、真ん中は浅瀬になっている。浅瀬の部分も2メートルも水面が上がる満潮時には、水路から背の真中に向かって流れが起こる。そこでは53（昭和28）年頃まで地引き網が行われていた。対岸にある2隻のボートは丸子橋の袂の2人の漁師の船で、ガス橋の上流にある船は川崎側の5人の漁師の船である。

ガス橋で貸ボートを営んでいた漁師は仕事の合間を見ては、シラウオを狙った地引網や、ウナギやコイを取る四手網漁、ボサでえび・カニを取る漁などをやっていた。アユは丸子橋より上流でないと取れなかった。

3 貸 ポ ー ト

イ 河原のにぎわい

川崎市多摩区菅の地先の河原で、1935（昭和10）年から茶屋が営業されている。茶屋の経営者の兄が、戦前から営業していた小川氏の後を継ぎ、脱サラして26年前の74年から貸ボート業を営んでいる。店には台船の他に、70隻程のボートが用意されている。以前は茶屋の前の多摩川は淵の状態、兄の店も隣で営業していたが、今では島ができて、貸ボート店は下流へ3百メートル下がった地点に移動し、釣客も少なくなった。

戦後しばらくは、春は堤の桜見客、夏は水泳のための川の家として賑わった。渡し船のための棧橋があり、そこから子供達は飛び込んで喚声を上げていた。川の中には瀬や淵があって複雑な地形の上に、湧き水も川底にあって水温も急激に変化するものだから、毎年のように水難者がでた。30年前の70年には水泳関係の営業はなくなった。10年前までは3月から12月の営業であったが、冬場は水害がないこと、釣客も少なからずあるので1年を通して営業するようになった。営業の中心は4月から9月で、土日がピークになっている。夏場は夕刻に涼を求めて遊びに来る客が多いので、夕刻から忙しくなる。苦勞するのは台風や大水、できるだけ水の通りを良くして小屋が流されないようにする。テーブルも高水敷に打ち込まれた木に固定されている。鍋・食器・調理道具は十名程の馴染み客に頼んで、堤内地にある自宅に運び込む。

93年に二ヶ領用水水門が新設されてからは、船は水門の中に避難させている。台風が来ることが予想されるようになると24時間前には船を動かし始める。以前はボートは4人がかりで、ヘリコプター型のボートは6人がかりで、土手に上げて1日仕事であった。98年はお盆の時に上河原堰の調整水門のオイルゲートが閉まらず、水位が下がる一方になった。その結果、船はテトラポットに乗り上げて、水位が戻っても船は沈んだままであった。船は破損していたことが判明して、8月の下旬に修理を終えた。10年前のバブル期には57隻のボート全てが貸し出されたことがあったが、今では4分の1に貸し出し量は減少している。健康維持のために定期的に行って来る客もいるが、河原に駐車場があるので一過性の客が多い。多摩沿線道路からも良く見えるので立地的にも恵まれている。

74年から5年は木製の船を使っていた。木船や屋形船は稲城市東長沼の久保井氏が建造した。木船は10月に船を川から引き上げ、洗ってペンキを落とした。その後パテを塗ってペンキで化粧する作業が毎年のように続いた。20年前の79年頃にヤマハからプラスチックボートを購入した。10年前に群馬県のスナガボートからボートを購入するようになった。1隻当り13万円で、以前より5万円ほど安くなった。また、その頃から2重底の船になり栓が付くようになった。子供達に人気のあるヘリコプター型の脚漕ぎボートは12年前にスナガボートから購入した。

競輪客の渡しも頼まれる。川崎や横浜の客が中心だ。興味深いことに2、3年で客層は入

れ替わる。また、川崎競輪が開催されると客が減少する。渡しの客もバブル期の約4分の一程になった。

貸ボートの客は集中してやってくるので人出が足りなくなる。そこで4人程の高校生を交互に雇っていた。今は親戚の者に声を掛けて手伝ってもらう。

83年の週末台風で河川が砂利で埋まり、茶屋の前にあった貸ボート店を現在の位置まで下流側に30メートル程移動した。砂利は波を打って移動しているようだ。今は台船から下流、水門の手前30メートルがボートが行動できる領域である。

休日になるとウインドサーフィン40隻、カヌー20隻が遊びにやってくる。レジャーの多様化が進んでいる。

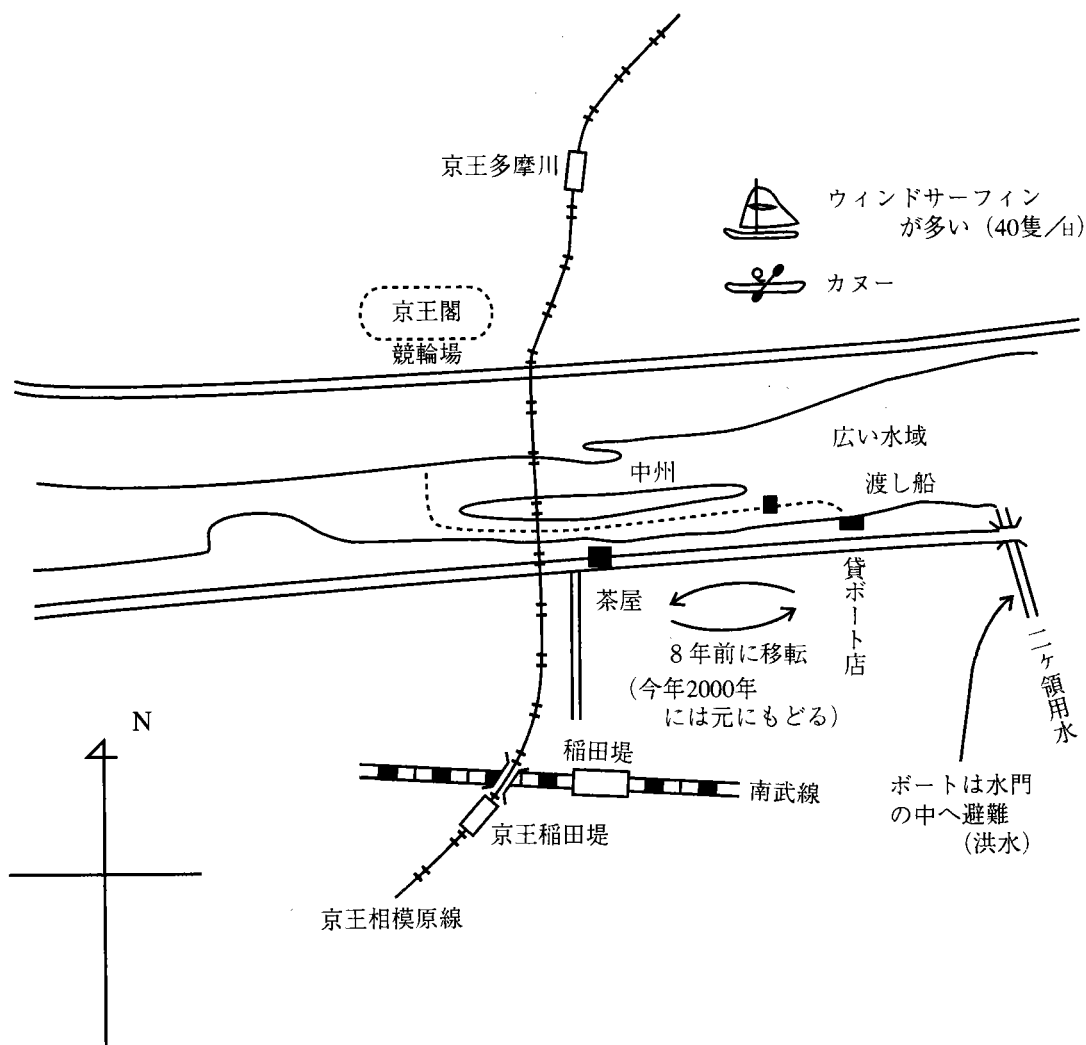


図4 貸ボート場

□ 今も残る屋形船

調布市和泉の地先の多摩川に、40年前に父が始めた貸ボート店がある。先代は多摩水道橋ができる1953（昭和28）年まで渡し船も営業していた。当時は川崎市登戸の人と1週間交替で渡し船を運行した。五本松公園の地先の多摩川でも貸ボート業が営まれている。多摩川のワンドの前に大きな中の島がある。それは70年代に入ると徐々に陸化して行き、74年の洪水の時に大きな島になった。川の表情は普段はおとなしいが、雷雨などがあると、直ぐに増水して中の島の人も取り残されてしまう。98年の多摩川の花火大会では、上流に降った時間当80ミリの大雨で増水して、花火師などが取り残されてヘリコプターが出動する事故が起こった。

60年頃は和泉側だけでも6軒の貸ボート店があったが、今では1軒になった。ボートを百隻、屋形船を1隻で営業している。4隻の屋形船があるが、3隻の屋形船はボートを繋ぎとめる台船の代りに使用されている。1番古い屋形船は川崎市多摩区中野島の船大工が63年に建造した。それは後に引き上げて箱釣用に改良したが、井戸水が出なくなって箱釣を止めて再び川に戻った。屋形船は地元の消防団や団体から注文が入って営業を続けている。幅は3メートル程あり、長さも20メートル以上ある大きな船である。船大工が地元になくなったので、修理の時には埼玉県船大工に依頼している。日当2万五千円を支払って船の修理に出張してもらう。

宿船もあったので、水浴客の更衣所として利用したり、投網を見物させたり、釣った魚をテンプラや塩焼きにして食べさせる場所になった。

62年～71年頃までは河川に大勢の客がやってきた。ボートに乗るために客が並んだ時代だ。自動車が普及し、レジャーが多様化して、多摩川から人々は姿を消していった。バブルの時代になると、河原に姿を現わし、土日になると野外パーティーを行うようになり、貸ボートに少し客が戻るようになった。バブルが弾けた今は最悪で半分の47隻だけのボートを出しても、5月のシーズンを除いては、全ての船が塞がることはない。対岸の登戸にも6軒の貸ボート店があったが、今は1軒だけが営業している。河川改修の後、登戸側の護岸に大きな石が打れた。河川の幅は狭くなり流れが早くなって、人はますます寄り付かなくなった。

プラスチック・ボートは、横浜の造船所から1隻20万円で購入した。補修にはさほど労力は掛からないが、オールを受けるクラッチ台の修理が大変な作業である。台風が近づくと河原の勾配の緩やかな浜から台車を卸して、その上に3隻のボートを横に並べて、トラックで引っ張り上げる。屋形船の台船は、イカリを打って船を高水敷の方に引き上げて行く、水が引いて行くとそれに合わせてロープを緩め船を下げた。台風が去るまでの苦労する作業である。向丘遊園地の方から強い風が吹くと、必ずと言って良い程台風の直撃を受ける。朝夕には、ラジオをしっかりと聞いておき、気象情報は頭に入れておく。時間当30～40ミリの雷雨でボートが沈むことがあるので、雷雨が予想される場合は船をしっかりロープで結び、トモにある蓋を開け、自然に排水できるようにする。最近は船に対するいたずらも多いため、朝夕河原に出て船に異常がないか点検を怠らない。

登戸側は少しでも雨が降ると、河川の流が早くなって営業ができなくなるが、和泉側では雨が降って、少々増水しても島陰になっているから、島の突端に赤い旗を立てたボートをイカリを打って固定し、そこから外に出ないように指導しながらワンドの中で営業を続けることができる。三人乗りボートで1隻千円だ。屋形船で1時間3万円、23人が乗ることができる。夏は平均2時間程で、コンパニオンもいる。

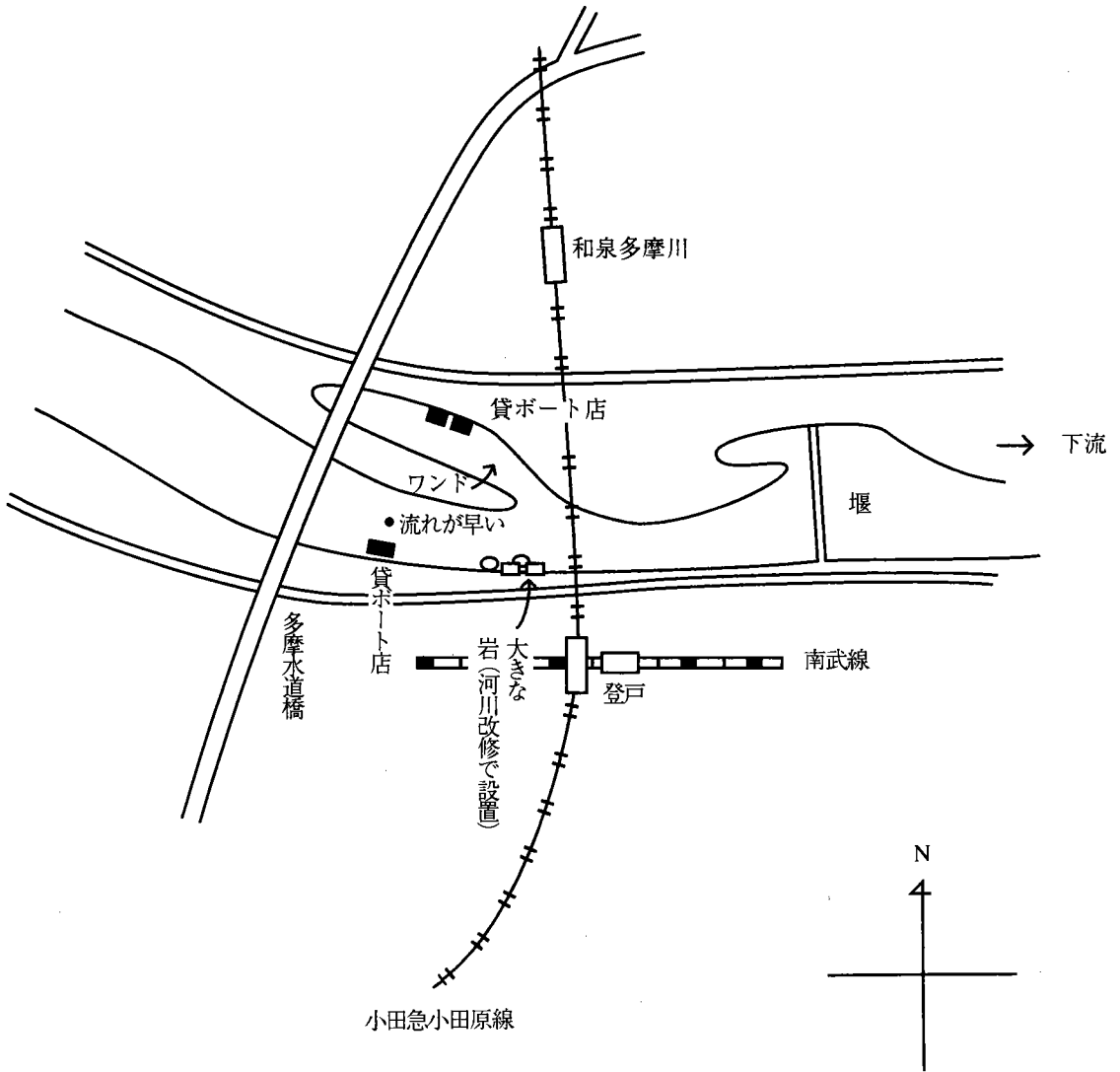


図5 屋形船乗場

八 客を選別する貸ボート店

世田谷区野毛の地先に、右岸のゴルフ場へ向かう渡し場がある。船頭はゴルフ客の一部に川や風の状況を考えないで船を出すことを強要された。自然の怖さを知らないので困りものものと苛立っていた。『渡しの船頭は3代続いた。以前の二人はやはり客に気遣って疲れ辞めた。夏は川の表面は温いけれど、その下は冷たくなっている。さらに川底はぬるぬるなんだ。渡しのある場所は川幅が狭くなっていて流れもきつく船を操るのは難しいんだ』と時計を見ながら客が現れるのを待っていた。『そのゴルフ場は以前は用賀にあったものだが、こちらに移ってきて渡し場ができた』と説明した。

世田谷区野毛の地先の多摩川の高水敷に、5隻のボートが高水敷に引き上げられていた。脇に立てられていた看板を見ると、貸ボートの許可が記されていた。世田谷区の野毛公園の傍の酒店が経営者であった。『二子橋も丸子橋もなかった時代に、旅籠をやっていた。上流の青梅市からやってきた筏師が、筏を川岸に止めて休んだ。帰りには歩いて上がり1泊して帰って行った。家の屋号はそばや、私が記憶している限りでは蕎麦屋は営業していなかった。私が戦後嫁に来た時にはジャリ船が全盛の時代であって筏は見られなかった。5年前までおじいさんが生きていた時は、30杯ほどのボートを持っていたので、おじいさんは毎日のように川に出かけていたね。川の屋形船もあって、7年前に焼かれ修理したものの台風で流されてしまった。』と老母が語った。

以前は深い淵になってあり、水深は3～4メートルほどあった。そこは赤岩と呼ばれていたが、狛江市の洪水の時に埋まった。その時は高水敷より1メートルは水面が上がった。また98年7月から3回の大雨で淵は完全に砂利で埋まった。赤い岩と呼んでいたが、それは川崎側の岸に赤い土が出ていたのでその名が付けられた。淵は100メートル以上あって、その中で貸ボートを2軒がやっていた。淵の下からは湧き水が出ていたので、水は冷たかった。昨夏も川の水を甘く見て水死した学生がいたが、今では瀬になって川の流れも速くなったものだから、相手がまず泳げるか確認してボートを貸すようになった。自ずと客は限られ、撮影などの目的のある客に依頼されてボートを貸している。

東京オリンピックの頃から川は汚れ、第三京浜が完成して、75年頃が最悪の状態であった。それから考えると今はかなり綺麗になった。1週間前から増水が続いたので船を引き上げている。8月21日の花火の時には舟を借りる人が来るが、通常は休日や祭日に川に出て貸ボートを営業するにすぎない。

台風の際は水位が4メートルほど上昇する。栈橋は長さ2メートル、幅1メートルの大きさで、増水すると、自然に外れロープで川岸に上がる仕掛けになっている。長さ5メートル、幅90センチのはしけ（台船）は自宅に持ち帰るようにしている。船はロープで引き上げる。さらに増水すると、栈橋は川から500メートル離れた退避場に置いておく。船、ボートは堤防の下の桜の木に結わいておいた。鎖は簡単に切れてしまうので、ロープがまさに命綱だ。夕方には必ず船の様子や川の状況を知るために河原に出ることが毎日の日課になっている。雷は増水も恐ろしいが、それ以上に落雷が怖いので乗ってきた車に逃げ込む。

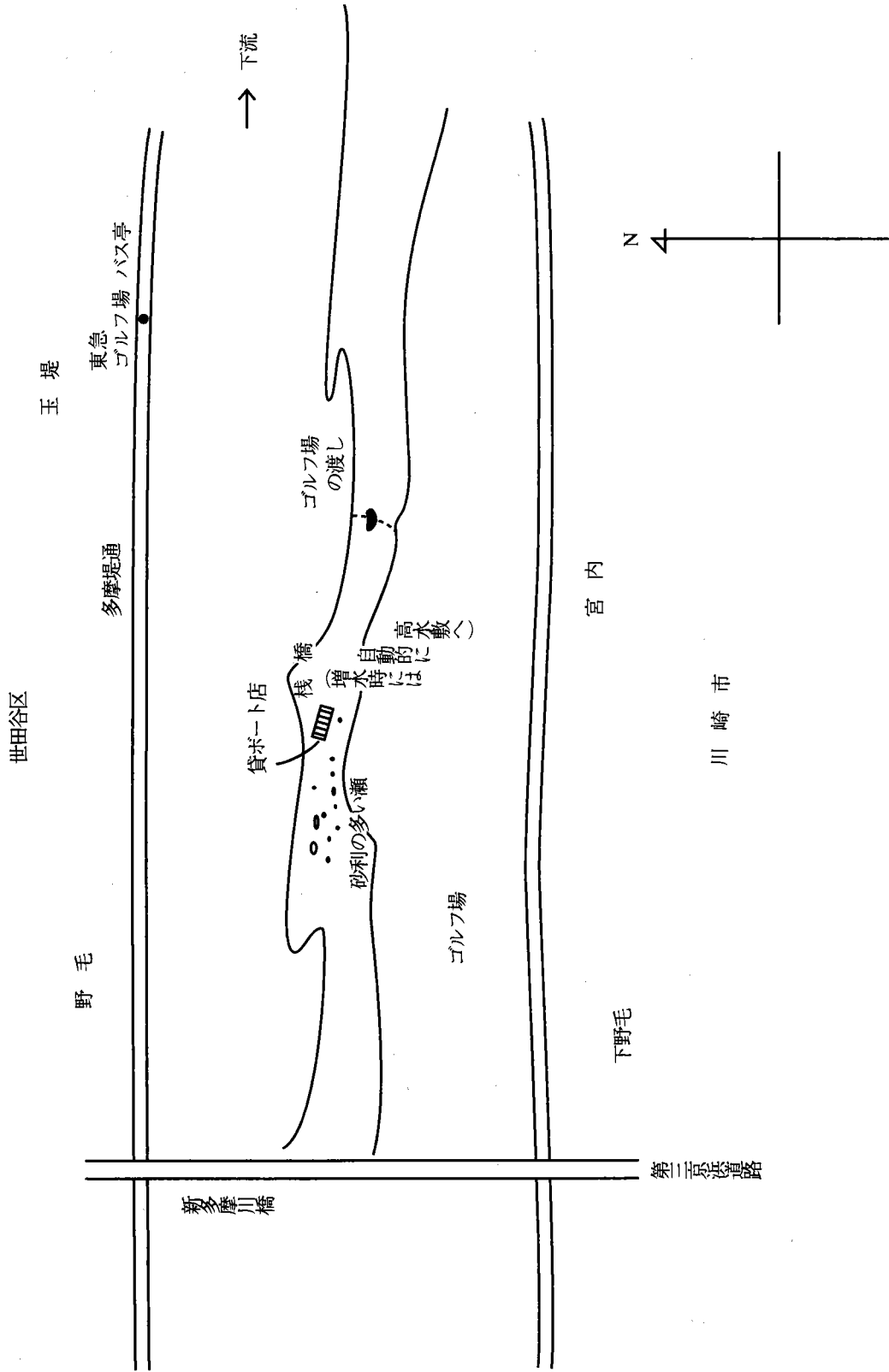


図6 ゴルフ場の渡し

95年頃までは、4月から9月まで河原によしず張りの小屋を建て、そこで父は寝泊まりしながら船やボートを管理していた。屋形船も91（平成3）年まで持っていた。1950年から60年頃まで、夏になると屋形船を出していた。丸子橋で花火大会があった頃は、会社の納涼会に船を出した。先代は船を繰り出して投網を披露したり、吊った魚を料理したりした。コイの洗い、鮎の塩焼き、小魚はテンプラにしていた。

『漁船は相模川の船を購入してきた（平塚市堤町の船大工）。相模川の船は多摩川の船に比べると海に出ることもあって吃水は深かった。船の修理は八潮市大場川の飯塚という船大工に依頼した。ボートは仲間から購入した。木製ボート時代は冬になるとパテを塗ったり塗装を施して修理した。プラスチックボートは昭和60年に鴨下氏より購入した。

貸ボート場は以前は富士スバルの建物の前にあった。私が記憶している限りでは3回程貸ボート場は移転している』と店主は語った。

二 東急電鉄と催し物

丸子橋（川崎側）で父の代から貸ボートの営業を始めた店がある。東横線に客を集めるために東急は多摩川で様々な催物を試みた。そのひとつとして多摩川に船を浮かべて納涼船を始めた。その白羽の矢が当たったのが、多摩川の砂利船や漁で生きる人々であった。船を使って、ビアガーデンや洋食（とは言ってもカレーライスのみ）などを営業した。多摩川園側も積極的に援助して、医者や看護婦なども派遣してきた。現在ある台船の4倍の大きさの船が10艘ほど川面に浮かんでいた。花火や鶴飼い、灯籠流しやオートレース（日本ハムの練習場跡）などのイベントが賑やかに開催された。

その後は東急ドライビングスクールとなり、1970（昭和45）年頃に二子多摩川に移転するまで営業が行われていた。自動車学校に通う生徒が、送迎用のバスでは時間が掛かるので、事務所で行われる授業に間に合う様に貸ボート店の船を手配しておいては駆け込む姿も見られた。その場所は東急オリンピック球場となり、アマチュアの球団にも賃貸された。

東急は客を集めるために花火を援助した。その花火は68（昭和43）年頃まで続いた。丸子橋は通行止めになり、交通は二子橋やガス橋に回された。18軒あった芸者の置き家やキンチョーなどがスポンサーになり、花火を上げたり、仕掛けたのはとび職人であった。彼等は金で支払いを受けたのではなく、客席の升席であてがわれた。そこで職人らは客引きも熱心に行っていた。河原には水泳場もあって、夏にはよしず張りの川の家が設けられた。水泳場の一つは読売といい、もう一軒あった。

上丸子は砂利に関わる業者も多く、昭和の初めまで手で掘りながら川船で羽田まで運んでいた。それからトラックやダンプが登場して採掘が禁止されるまで活躍した。砂利船に乗っていた先代は昭和の初めに渡し船の権利を籤引きで引き当てた。1935（昭和10）年2月15日の丸子橋の完成まで渡し船の仕事を続けた。

戦争が終わって進駐軍が入ってきた。丸子橋の東京側と川崎側には兵隊が張り付いていた。彼等はテントを張ってろうそくで生活していた。当時の日本ではしつけが厳しかったが、ア

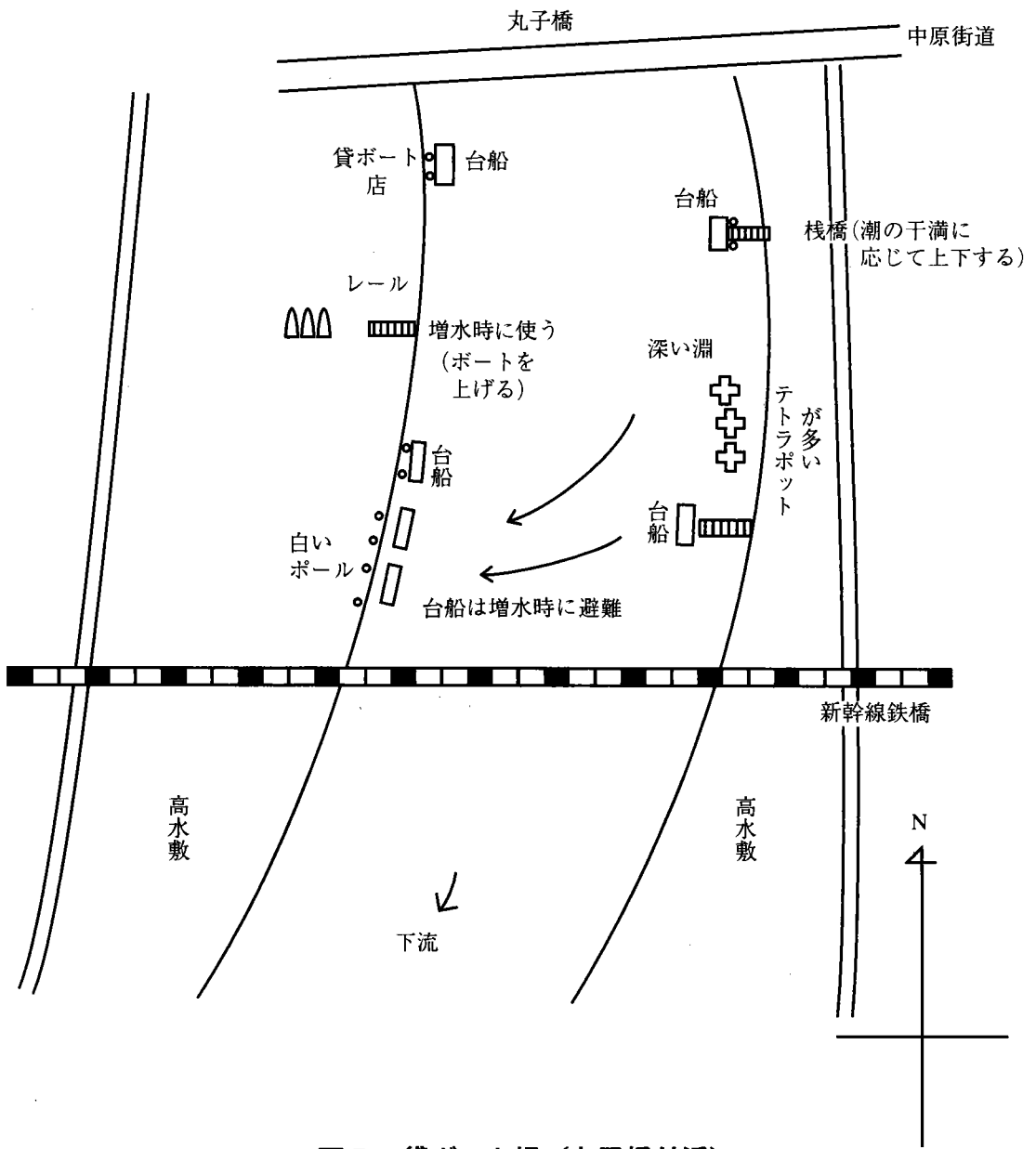


図7 貸ボート場 (丸子橋付近)

アメリカ兵は歩きながらパンなどを頬張っていて奇異に感じられた。1932 (昭和7年) 生まれの経営者は最後の学徒動員に出た。武蔵小杉に日新という工場があって、ゼロ戦の脚の部品を製造していた。その隣の松尾という工場では鋳物製品を生産していた。

進駐軍の兵士はボート遊びに来た。客の3分の1はいたと思う。当時はボートに上手に乗れる日本人は少なかったから、先代はテンエンとサンキュウという言葉覚えて、若い大きな兵士を相手に商売をした。ときおり煙草をもらってはサンキュウを連発していた。

木の船は皆個性があって、30杯のボートがあったがそれぞれ特徴を掴めた。29年前からプラスチックボートを導入したが、どれも似た様な船になったので船体に番号を付けた。

台風が来る時は、台船は大師橋迄持って行く。漁船で約1時間ほど引いて行く。そこまで行くと丸子橋の水面が3メートルも上昇する時に1メートルも上がらない。1年間に4回ほど台船を下げる。ボートは大堤防のすぐ下まで持って行く。夏の雷雨の時は、特に立川から八王子で降ったものは雨が止むすぐに水が出て来るので、台船は新幹線鉄橋の下に避難させる。

伏見、丸子荘などの料亭があった。中原街道の丸子宿にあり、川止めがあったりするとたくさん旅人が宿泊することになった。18軒の待合は64（昭和39）年まで営業を続けた。それらは今ではマンションになった。

ホ 改善された自然環境

丸子橋（東京側）にある貸ボート店の一つを訪ねた。現在の主人は2代目で、引退した先代は1955年から営業していた。毎年5月に建設省に申請を出し許可を得て仕事をしているが、97年からは5年に1度の申請で済むようになった。書面通り営業しているか調べる検査は毎年1回行われている。多摩川の水質も良くなり、コイやフナは1年中、夏はウナギ、マルタ、ボラ、テナガエビ、秋から冬にハゼが釣れる。水面にはガチョウ、カモメ、夜になるとお台場へ戻るカワウ、カルガモが生息している。都が年に2回水質検査を実施しているが清掃工場の近くでダイオキシンの値が高いものの全体にはかなり改善されている。60年代後半から70年代前半に水質が悪化したが、その後、工場排水の規制、下水道の整備で少しずつ良くなった。堰の手前では秋にマスやサケが投網に掛かることもある。そこは丸子の渡しのあった所、和船（リュウセンコウ）を使って最近まで営業していた。川崎側の貸ボートを営業している榎本さんが、片道200円で川岸で客が手を上げると迎えに来た。しかしコースが新丸子橋の架け替え工事の下に入ったので7年前から渡しは休業している。架橋工事が続く間は渡しは見られない。客の注文でモーターで動かしたり、竿で船を操ったりする。

貸ボート店には和船があるのでCDのカバーの撮影の依頼を受けることがある。歌手がエンジンを外した船に乗り込み写真を撮る。和船は10数年前に相模原のヨネ造船に製作させた。当時、店主は船の売買にも従事していたので、船の規格を作っては貸ボート業者などに船を販売した。台船は横浜市鶴見区の峰造船に建造させた。ボートは二重底になっており、雨が降って船底に水が溜っても脇にある栓を抜くと排水ができる仕掛けになっている。ボートに溜った水を掻い出す作業は重労働なので、登戸、狛江、稲田堤などの貸ボート業者から重宝がられ百隻程の注文を得た。ボートは横須賀市のグローバルボートで建造させた。90年の話だ。

船の売買をしていた頃には特別な船の注文にも応じた。エンジンは日本製で十分であるが、推進力を替えるスタンドライブはマークルーザーやボルボなどの輸入品が秀れている。東武サファリ公園のぶつけて遊ぶ船の注文も取った。90年までは、日本にそんな船はなかったの

で、アメリカのVTRを見ながら図面を起こした。船体はアキレスゴムに発注して、それにエンジンを載せて完成した。

へ 増水に供えて

取水堰は37年（昭和12年）に完成した。川が増水すると堰にある水門は開き下流へ水は流される。以前に狛江市で堤防を壊す洪水があったが、最近はその様なものは起っていない。昨年は2度グランドのある河原（高水敷）まで水面が上がった。東京側はコンクリート護岸の上、その周りにはテトラポットが撒かれてある。船がそれらにぶつかると大破するので、船を川崎側の土手に避難させる。台船は新幹線鉄橋の直ぐ上流の河岸に打ち込まれた緑のパイプにロープでしっかりと固定する。台船にエンジン付和船を抱え込んだ形で移動する。南風が強いと和船を下流側に向け一気に動かす。

ボートは水位がさらに高くなると4WDの車に片側2隻ずつ計4隻を繋ぎゴルフ場の中まで引き摺って行く。ゴルフ場もネットを外すので話し合って避難する。以前はリヤカーで1隻ずつ載せて運んでいたのが、20隻の船を移動するのは大変な作業だった。さらに水位が増えると堤防の根元まで運ぶ。ボートを容易に河原に上げられるようにレールを敷き、その上にゴムの車を付けた。木製ボートの時は1年に1度は水から上げ塗装した。塗装が乾燥すると船が腐らないように水の中に漬けておいた。プラスチックボートはヤマハが60年代前半に完成し瞬く間に普及した。

貸しボートは花見の季節やゴールデンウィークが一番忙しい。5年前から河原でバーベキューが流行り、客が絶え間なく来るようになった。秋は休日を中心に忙しい。12月になると客は切れるが、その時はボートのスノコの修理や、オールの塗装に余念がない。正月は凧上げなどの河原に人が集まり、ボートに乗る客もいるので開店する。2月はさすがに客はいない。シーズン中でも風が吹いたり、増水すると休業する。

台船は幅2メートル長さ11メートルで二重底になっている。屋根が付いていて小さな部屋も完備している。そこには流しやコンロも設けられている。夏の雷雨、台風、強風の時は不寝番をすることもある。天気予報で大荒れと言う予報が出ると警戒に入る。3年前に今は川崎側にある台船を係留していたロープにゴミが引っ掛かり重みで船が転覆し流されてしまった。上の構造物は簡単に壊され、台船だけが河口付近の味の素工場の地先で発見される事件があった。八王子で百～百50ミリの雨が降ると5、6時間後にその水位はぐっと高くなる。天気予報だけでなく、交通情報も洩れなく聞いて調布や国立でどんな雨が降っているか注意している。合羽を着て警戒するが雨に当たっていると夏でも寒い。台船の中には小屋があるので一息つける。

川岸に客が寄ってくるように河原の草刈りも大切な仕事だ。春は15日に1度、夏は10日に1度の割で機械を掛けている。しかし夏はそれでも草の成長に追いつかない。

ト 最下流の貸ボート

今から30年前にガス橋で貸ボート業を始めた。それ以前はトラックの運転手であったが、交番の前にあった貸ボート店から引き継いだ。店主は川崎市上平間に住んでいた。ボートは23隻許可をもらっている。始めた頃は50隻のほどがフル稼働していたが、96年頃からは不景気の影響を受けて、5～10隻ほどの船を準備しておけば十分間に合うようになった。10年前までは水島氏が建造した木造船を利用していたが、冬場になるとペンキを塗ったり、補修をしたりと忙しかったので、ヤマハのプラスチックボートに切り換えた。本当はプラスチックボートも手入れをすると持ちが良いのだが、ほとんど手を加えていない。3月になると、土・日に営業を始める。7・8月は毎日営業している。9月から11月一杯も土・日に営業を行っている。船の管理もあるから毎日のように来ている。

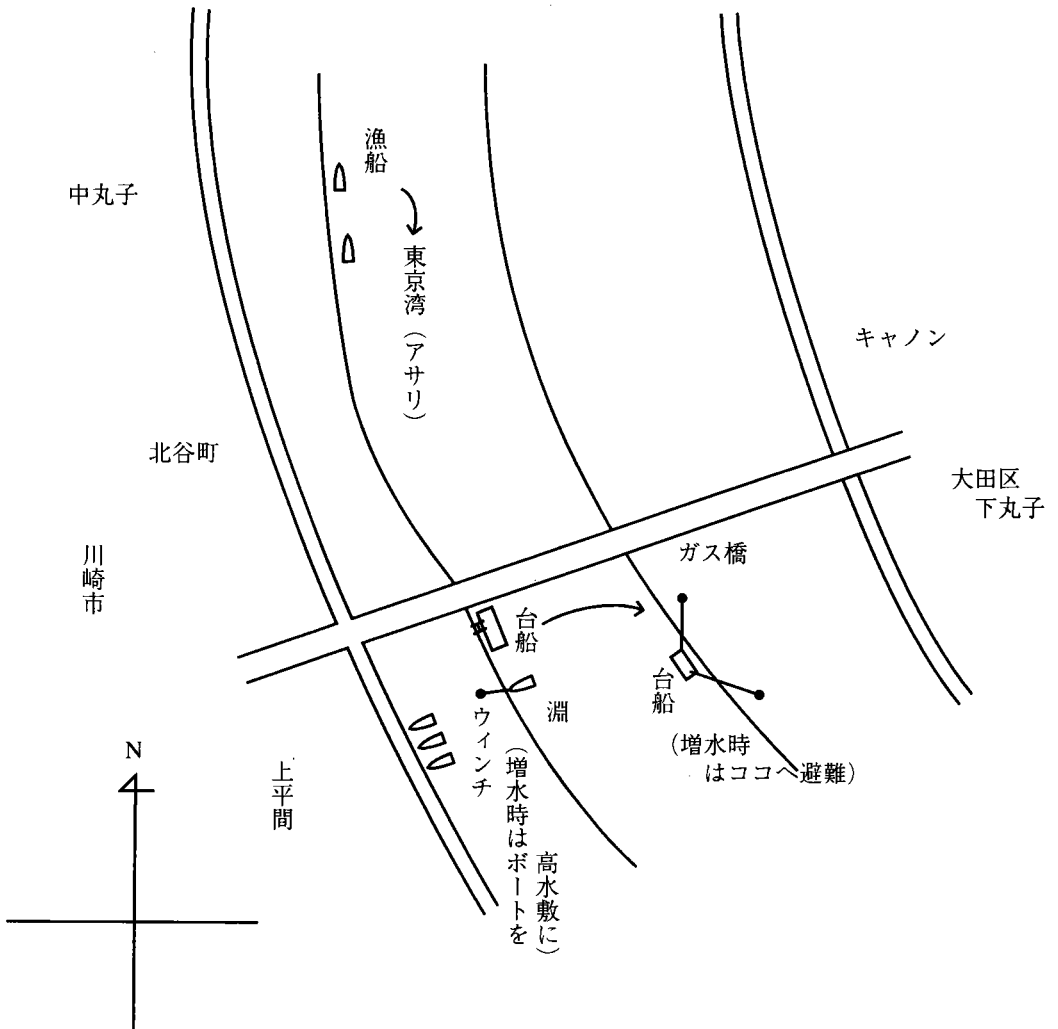


図8 貸ボート場(ガス橋付近)

ガス橋付近は川崎側が深く、東京側が浅くなっている。ボート遊びをする客には橋の付近から下流の鉄塔付近までの範囲で遊ぶように注意している。1年に3回程来る台風が一番大変だ。ボートをウインチを使って引き上げる。台船は対岸の東京側に運び上流側と、下流側にロープを2本張って固定する。台船の小屋の中で川の様子を見たり、ボートの管理で不寝番をする。水位が上がるおそれが出てきたら、ボートは堤防の下まで移動する。かつては潮が引くと硫化水素ガス噴き出していたが、それから考えると水質はかなり良くなっている。

現在は最下流の貸ボート店である。多摩川大橋にも貸ボートがあったがモーターボートの教習所が変わった。

チ ボートの建造

1933（昭和8）年に嫁に入った女性は、1932（昭和7）年まで祖父の水島藤五郎、父の吉五郎、夫の光五郎が造船した話を聞いた。祖父達は河原や河川の砂利を取る船の建造をしていたが需要が減少したので、商売替えをすることになり貸ボート業を始めた。結婚した時には白羊舎しかなかったが、しばらくして三菱、東京無線、三井精機（ツガミ製作所とっていた）、北辰製作所、富士航空（戦後キャノン）、日本精工（ベヤリング）などの工場が進出してきた。

昭和6年まで平間の渡があって兩岸をつないでいた。その年に初代のガス橋が完成した。それは木製の橋でリヤカーがやっと通れる幅の橋であった。目的はガス管の保守点検のための橋であったのでその名称が付くことになった。昭和35年6月に二代目のガス橋が出来上がった。地域の人が車も通れるような橋の建設を願って、ようやく完成したものであった。以来、ガス橋の完成を祝って6月の第二日曜日にはガス橋マラソンを実施している。

和船時代は祖父、父などが山に入って木材を購入してきた。和釘は鶴見の鍛冶屋に叩いてもらった。河原に小屋掛をして船を造っていた。

ボートになってからは和船時代の買い溜めしていた木材を使いながら船を造っていた。船の設計図があるわけではなく見様見真似で造った。オールやツバも自分で造り、それを結ぶ皮を浅草に買い求めた。船は堤防の脇にあった物置で建造した。物置の長さは3間ほどで天井も高かった。

長さ1間半、3人乗りボートの工程。①樺の1本の棒を竜骨にしてその先にミオシを立て、前もって切っておいたトモ（船尾）とドウの板を入れる。②10センチ間隔で肋骨を入れる作業に入る。長い鉄鍋に前日から水を張って置き、庭にあるカマドで湯を沸かす。その中に樺の棒を入れて柔らかくする。それを予め台の上に釘を打って作った矯正に嵌めながら肋骨を仕上げる。その肋骨を助手に持たせて、銅のワッシャー、銅の釘を使って固定する。その銅製品は船具屋で購入した。③縁のサンは杉の板で作り、その上に腰掛け板3枚固定する。④杉板で作った外板を固定して行く、その時に板を曲げる場合は湯を掛けながら曲げる。⑤パテを外板の継ぎ目に塗り込み、ペンキで塗装する。⑥オール受け、オール鏝を付けてボートは完成した。

4 釣 人 の 調 査

① 98年8月24日（月）

多摩川では長い棹を持ったアユ釣りの人達が点在しているが、多摩川水道橋のワンドでヘラブナやマブナを釣る高齢者や子供達が集まっている。

二子玉川の駅を降りて、多摩川の河原へ進むと、親水護岸のせせらぎの中で幼稚園生が水と戯れていた。野川との合流点付近（野川）で釣を楽しんでいる老人がいた。声を掛けてみた。野川も橋の下にはフナが多い。老人のいるフカンド（トロバ・深み）ではクチボソが群れている。少し上流の浅瀬の水域にはヤマベがいるので釣師が集まっている。老人は93年に脳溢血で倒れた。そこでリハビリを兼ねて釣を行っている。しかし、地べたに座っての釣は辛いので、護岸の柵がしっかりした当地で、体をもたれさせて釣をやっている。煉餌を何度も針に付けながら、手や指のリハビリを続けている。たいていは餌が川底に就くまでに取られてしまう。たまに吊れる魚もリリースする。子供達が川に入って水遊びをしてくれると、水が濁って魚がよく釣れる。

② 98年8月20日（木）

田園調布高校1年生2人の調査。丸子橋からガス橋まで66人の釣人が楽しんでいた。糸の長さを特に決めずにミミズを餌に釣を楽しんでいる人がいた。多摩川でよく釣れるポイントは丸子橋とガス橋の真下あたりで、時間は10時30分から約2時間。1日、最高で30匹の魚を釣る。釣った魚はほとんど逃がすが、ハゼはテンブラにすると美味しい。多摩川では、コイをよく見かけるが、ブラックバスは見ない。

新幹線鉄橋の下で釣をする人は、もう少し水が綺麗になればと訴えていた。そのポイントでは、水面に生活排水による泡が浮いていた。ゴルフ練習場周辺で釣をする人はいなかった。ガス橋では、ファミリー単位で釣を楽しんでいた。（1-A 伊藤、小原）

③ 99年3月15日（月）

田園調布高校1年生4人と調布堰からガス橋まで歩く。10時過ぎに学校を出発。工事事務所の脇から多摩川左岸の堤防に出る。二子橋の掛け換え工事が最後の局面を迎える段階で、アーチが繋がった。橋を潜り抜け水門が見える地点までやってくる。到着した頃、川からリールを持った少年2人が上がってきた。対岸には3人程リールを河原に投げている人がいた。水門と二子橋との間の高水敷には青いシートで覆われたホームレスの小屋が3棟、川に平行して点在していた。左岸にはテント小屋は見られない替りに、橋脚の下の暗くなった場所に所帯道具が並べられている。ボート屋さんがいつもは営業している場所の護岸に座って、釣りの準備をしている人がいたので聞いてみる。『今は干潮時間で水が引いている。煉餌でフナを狙っている。そこは深場になっているので、ウキが見えて好都合の場所だ。寒い時期は

フナも深場でじっとしているので、1日3枚も釣れば上出来だ。朝・夕にウキが動く。鶺鴒の木に住んでいるので、暇さえあれば来る』。

そのすぐ下流で釣りをしている人は、ウキを見ながら『ヘラは4月から11月がシーズンだね。6月にはイナッコも多数飛び跳ねるようになるよ。ここ10年は5～6cmの小さな魚が釣れなくなって、枚数もさほど出ないな。5、6枚釣れば最高だね。それも環境ホルモンの影響かな』。

その下流で4人のグループが2本のリール竿を遠くへ投げていた。『餌にはパンを付けコイを主に狙っている。浅瀬が多いのでうまく掛かるか分からない』と多摩川で2年程の釣り歴の人が話した。

新幹線鉄橋の下で青年がリールに疑似餌を付けてテトラポットの周りに盛んに探っている。『ブラックバスを狙っています。近くに住んでいるので釣りをやっているのですが、多摩川にはそれほどバスはいませんね。多摩川では2年程、釣をやっている。バスは冬場は浅瀬にいるんですよ』。

川を下ってゴルフ場の地先に出る。深い縁になった所で4人が竿を入れてヘラブナを狙っている。上はゴルフボール避けのネットが覆いかぶさっている。『1日に3、4枚釣れば良いかな』と取られたしかけを作りながら、答えが返ってきた。

ゴルフ場から、高校のグラウンドとの境目の地先に2隻のボートが係留してあった。その傍らで2人の年配の方が談笑していた。『私は漁師だ。東京湾で漁をしている。今は釣人のマナーがなくなってない。結核に良いとされ、コイは貴重な魚だったが、紐で括ったまま放置する者がいる。漁船を荒らされ流されることもしばしばだ』。

さらに下ってグラウンド前で、釣りをしている人がいた。『4年前はヘラブナが1日に30～40枚は捕れたが、今ではうまく行っても10枚程だ。どうも鶺鴒が影響しているのではないかと思っている。1月頃は3羽しか高圧線にはいなかったが、今の季節は70羽程になっている。川の中に降りてきてフナ・アユなどの稚魚を狙っている。それがヘラブナ釣りに大きく影響していると考えられる。ゴルフ場と地先と下流側にワンド（深場）になっている。私のいる場所は浅場になっていて、今の季節には釣りには向いていないが、ゴルフ場のネットが覆い被さり圧迫感のある場所より良いので、この場を陣取っている』と語った。

下流側のワンド（深場）に行くと、2人の釣師が糸を垂れていた。日曜日になると、その場には10人以上の人がやってきて賑わう。そこでもカワウの影響を受けてヘラブナの数は減っていると話していた。傾斜した栈橋を自前で設けて、潮が満ちてくると少しづつ栈橋を上の方に上がり釣をする。

④ 98年11月14日

田園調布高校1年生男子生徒5人の調査した。午後2時から3時までに、多摩川の釣人の調査を行った。ガス橋から多摩川大橋の範囲だ。東京都側の14ポイント、川崎市側のガス橋から下流の多摩川大橋までの6ポイントで調査をした。高架線から下流、多摩川大橋までの

東京側に釣人が多くいた。逆に対岸の川崎市側には、ゴルフ場もあって釣人は少なかった。

調査地点	人数	餌	狙う魚	調査地点	人数	餌	狙う魚
東京都側				川崎市側			
1 ガス橋	1人	ゴカイ	コイ	15 ガス橋	2人	ルアー	フナ
2	1人	煉餌	コイ				ハゼ
3	1人	ゴカイ	フナ ハゼ	16	1人	ゴカイ	フナ
4	2人	ルアー	ボラ	17	1人	ゴカイ	ハゼ
5	1人	ゴカイ	フナ	18	1人	ミミズ	コイ
高架線				高架線			
6	1人	ゴカイ	コイ	19	2人	ミミズ	ボラ
7	1人	アイソメ	ハゼ	ゴルフ場			
8	2人	ミミズ	ダボハゼ				
9	3人	煉餌	コイ・フナ				
10	6人	ミミズ	ハゼ				
11	1人	煉餌	コイ				
12	2人	ゴカイ	コイ				
13	4人	ゴカイ	ハゼ コイ				
14多摩川大橋	1人	ゴカイ	ハゼ コイ	20多摩川大橋	1人	煉餌	フナ

(1-E 稲川、酒井、今井、山懸、大垣)

『調査結果から、その水域の多摩川ではコイ・フナ・ハゼ・ボラなどを狙う釣人が多いこと分かる。川を歩いていて、川がいつの間にか汚れているように感じた。調査を通じて川の浄化の必要性感じた』と生徒は感想でまとめた。

5 ま と め

川魚は、高度経済成長期まで農村に住む人々の重要な蛋白源であったから、農民の中にも漁業権を持つ人が少なからずいた。上流から魚が流されてくる増水期にはそれぞれ大きな網を持って河原にやってきた。60年代まで農地が残っていた多摩川中流では見慣れた光景だ。都市の発展とともに生活スタイル・食生活も変化して、伝統的な川魚漁は減少した。60年代以降の河川の水質の悪化は、人々の食卓から川魚を遠ざける傾向を強めた。

河原では様々な催しや遊びがあり、大勢の人を集めた。橋の両端に幾つも料亭を集積させた、丸子橋や二子橋の周辺の地域もあった。そこではアユなどの高級魚に対する需要が高まった。多摩川の資源量には限りがあるから、より多くのより姿の良い魚を求めて漁師は他県の河川へ行くケースも現れた。そのような遊びも高度経済成長期には姿を消した。

専門の川魚漁師は少なかったので、魚の販売先が減少しても致命的な打撃にはならなかった。高度な技を必要としたアユの投網などは、漁師達によってレクリエーションとして継承された。多摩川の中流、丸子橋より上流ではアユの投網が多いが、感潮河川で水量が増える丸子橋より下流では、四手網漁が見られた。さらにガス橋まで下がるとアユ漁はなかった。

80年代以降の多摩川の水質は改善されているが、シラウオやギバチのように姿を消したと思われる魚がいる一方で、ブラックバスなどのような外来種が登場して、生態系が変わったのではないかと指摘する漁師がいる。一部には再び多摩川が汚れてきているという指摘もあった。

60年代まで、多摩川の河原では花見・水遊び・花火・灯籠流しなどのイベントが催されて賑わった。多摩川の水質汚染は、河原から人々を他に追いやった。貸ボート店は経済的な苦境に陥った。後継者不足も相俟って閉店するケースが増えた。80年代の後半になると、バブル経済やアウトドアブームの到来で河川に人々を呼び戻したが、レジャーの多様化で貸ボート店が活況を呈している状態にない。

貸ボートは木製の船からプラスチックボートに切り替わった。多摩川に架かる橋の傍らで船を建造していた船大工の姿は完全に消滅した。

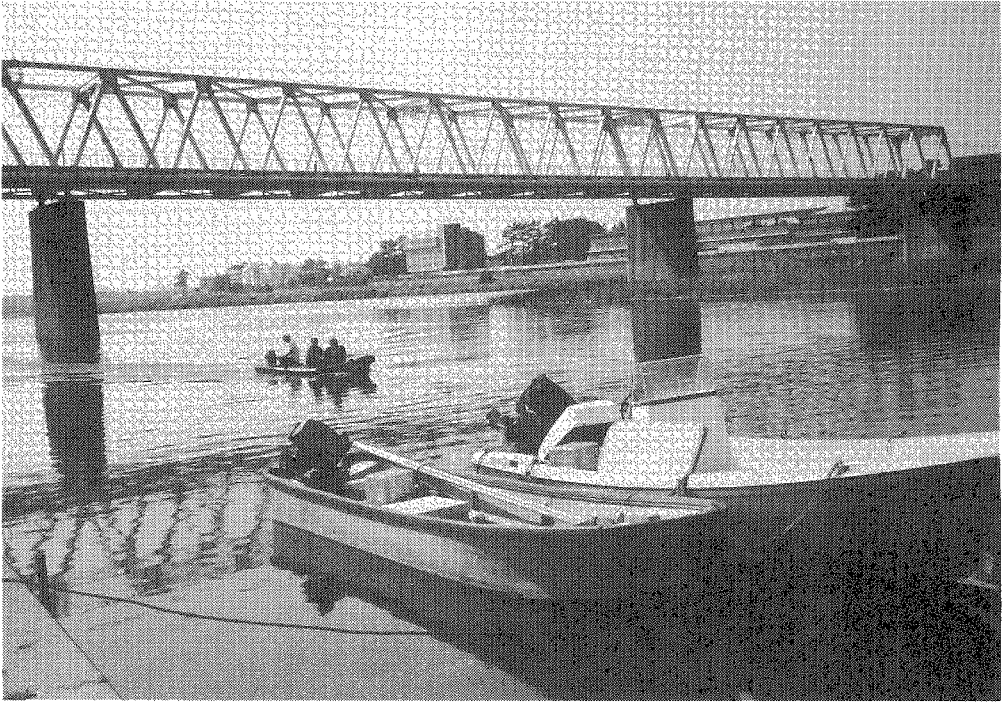
貸ボート店で働く人達は、河川の恵みや恐ろしさを身を持って体験している。台風や雷雨に対する備えは万全である。多摩川の砂利の移動は淵を瀬に換えて、貸ボート店の存在を左右しかねない。河川改修工事も多大な影響を与えている。

釣人調査では釣ブームの定着が理解できた。川の中に入って、流れの速い瀬で体力を必要とするアユ釣も見られるが、ワンドや淵、支流などの流れの緩やかな所ではフナやヤマベなどの釣を子供達や、高齢者が楽しんでいる。リハビリの代わりに熱心に釣をやるのも今日のである。調布堰から下流の感潮河川ではボラやハゼを狙う釣人が見られる。

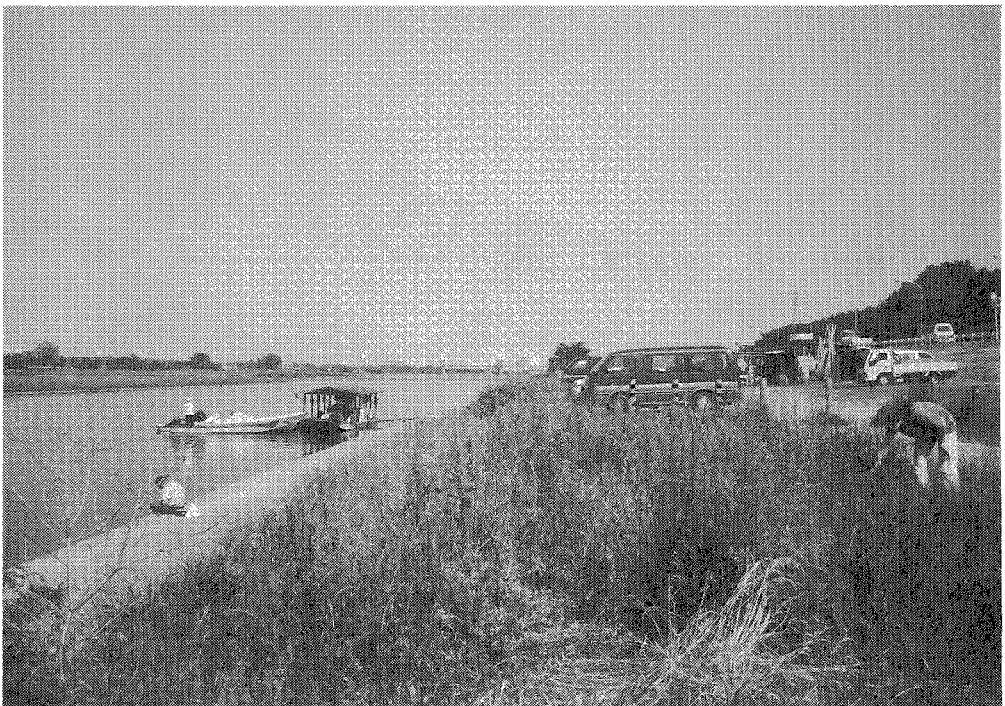
多摩川には様々な人々が生活している。豊かではあるが限られた自然環境でもある多摩川、様々な人々の存在の相互理解と、自然環境を守るという共通理解を深めるために研究を続けたい。

資料編

現在の多摩川の姿 〈写真集〉



① 京王相模原線と渡船 京王閣競輪に行く客を乗せる。(川崎市多摩区菅稲田堤地先)



② 貸ボート店の台船。(ボートを係留する船) (川崎市多摩区菅稲田堤地先)



③ 99年8月14日の洪水で流され、破損したボートを修理中。(川崎市多摩区菅稲田堤地先)

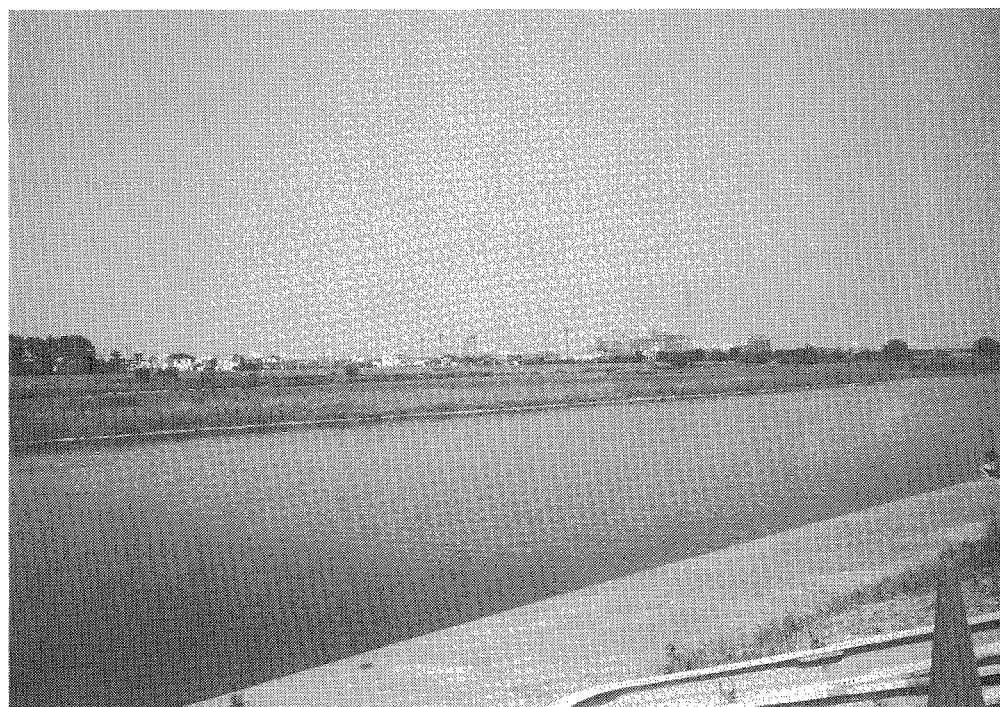


④ 修理中のボート。(川崎市多摩区菅稲田堤地先)



⑤ 足漕ぎボート。

(川崎市多摩区菅稲田堤地先)

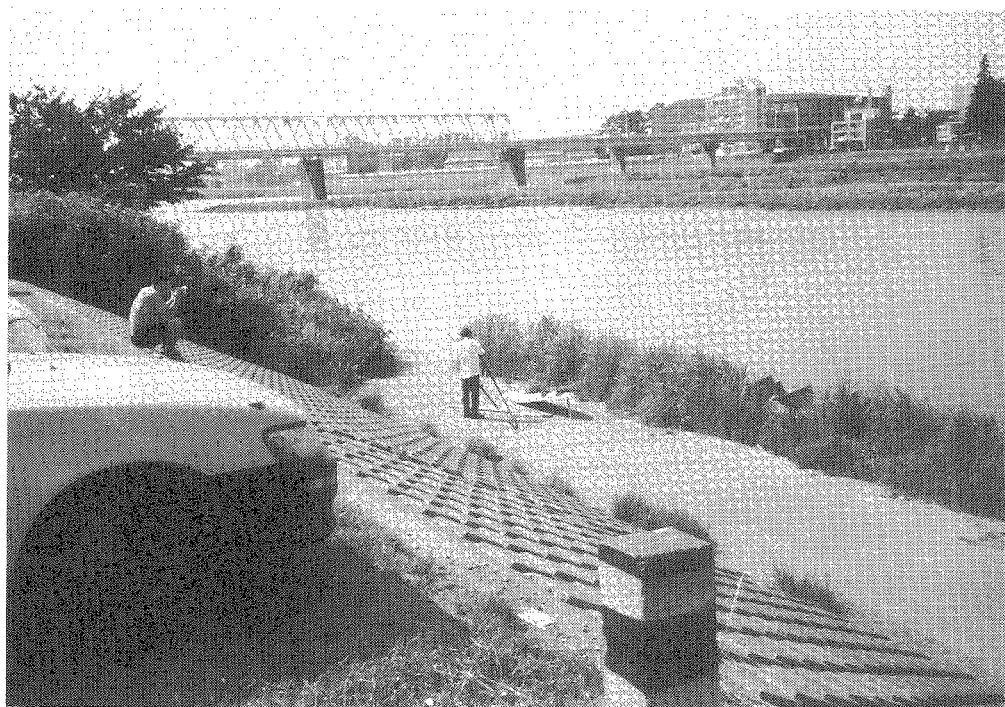


⑥ 広い水域。

(川崎市多摩区菅稲田堤地先)



⑦ ウィンドサーフィンを乗せて集まった自動車。 (川崎市多摩区菅稲田堤地先)
近いこと、淡水であること、比較的水が綺麗なことが愛好者にとって魅力的だ。

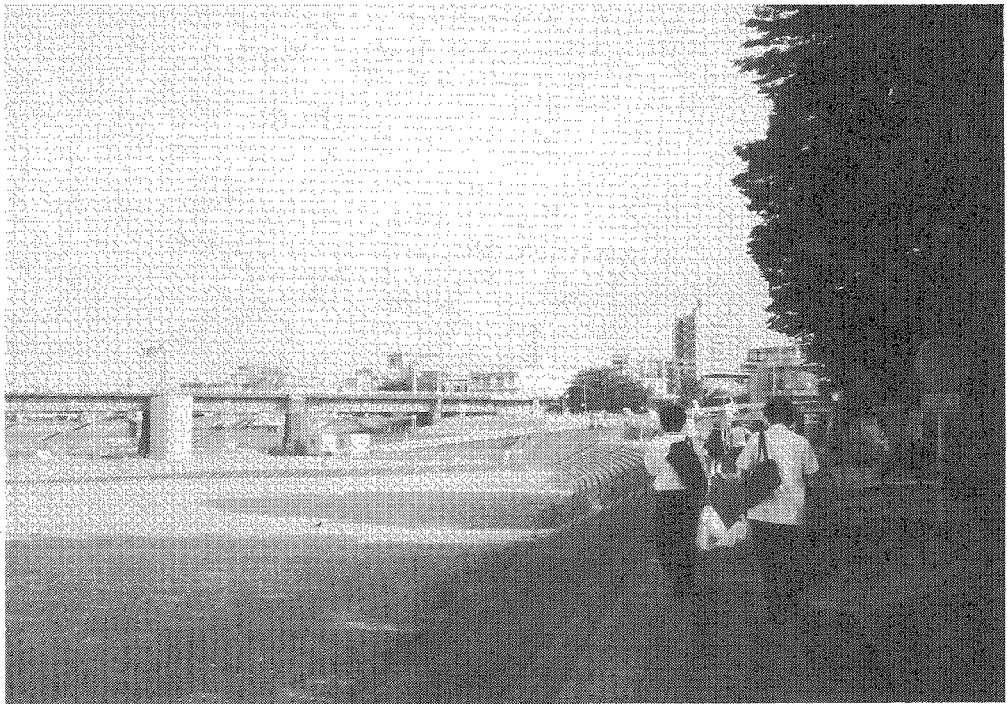


⑧ ウィンドサーフィンを組み立て中。 (川崎市多摩区菅稲田堤地先)



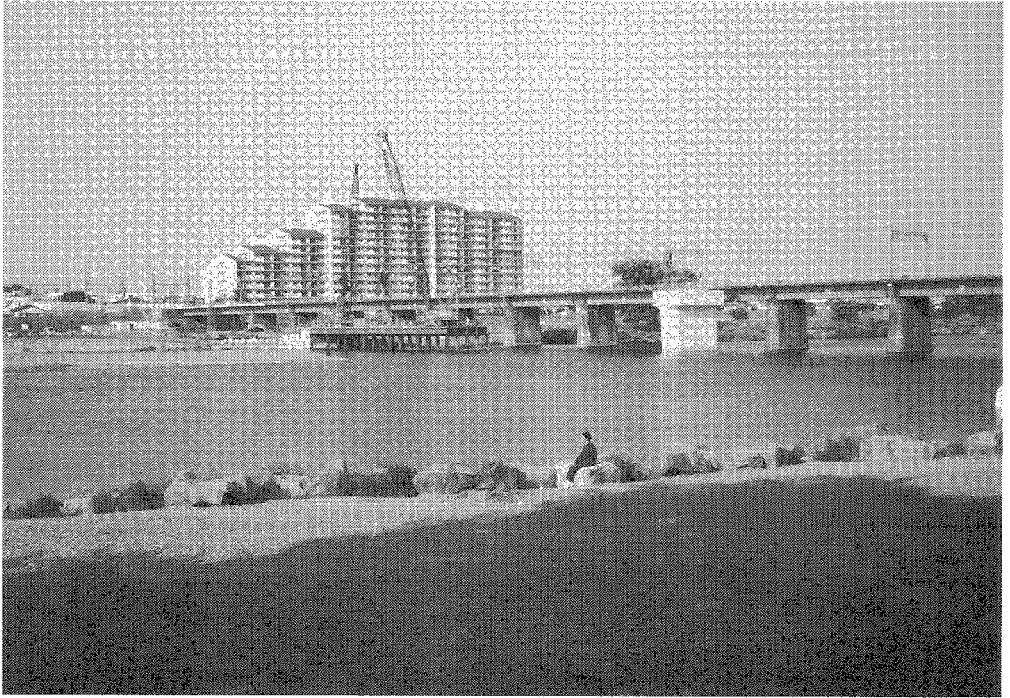
⑨ ウィンドサーフィン。

(川崎市多摩区菅稲田堤地先)



⑩ 小田急小田原線登戸駅の地先の多摩川右岸は、
河川改修で50メートル程埋め立てられた。

(川崎市多摩区登戸新町地先)

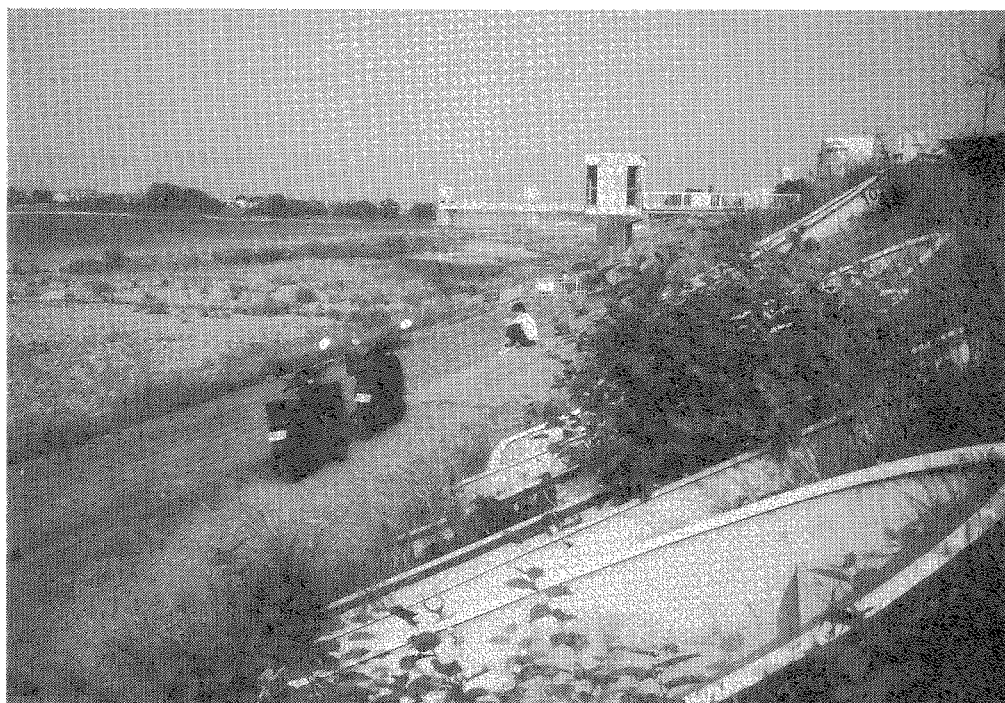


⑪ 河川改修で多摩川右岸には大きな岩が配置された。

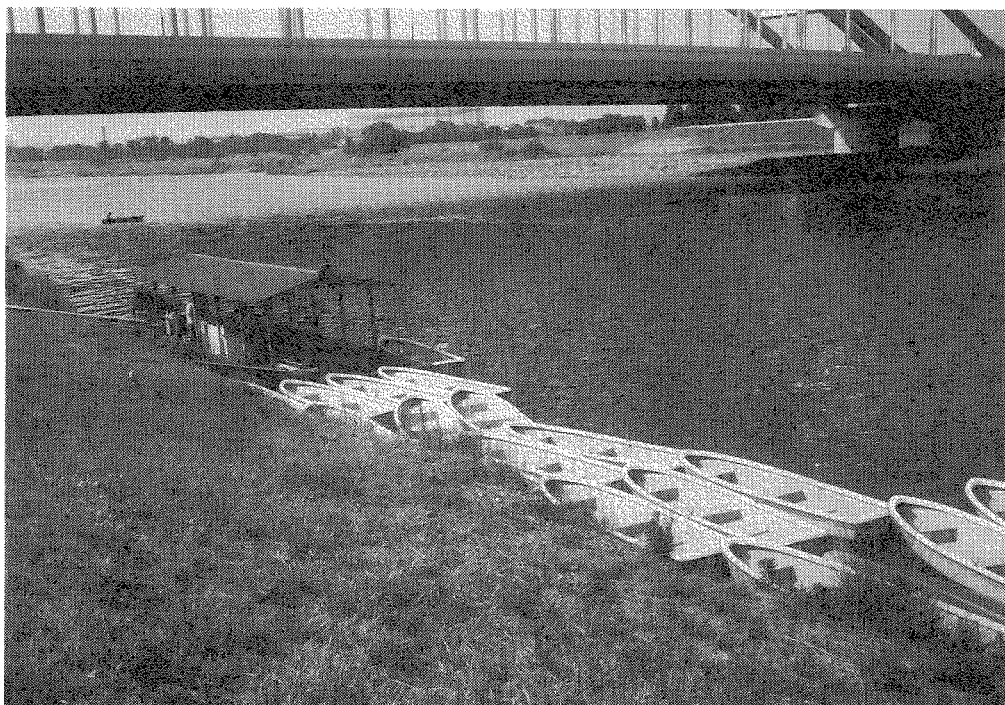
(川崎市多摩区登戸新町地先)



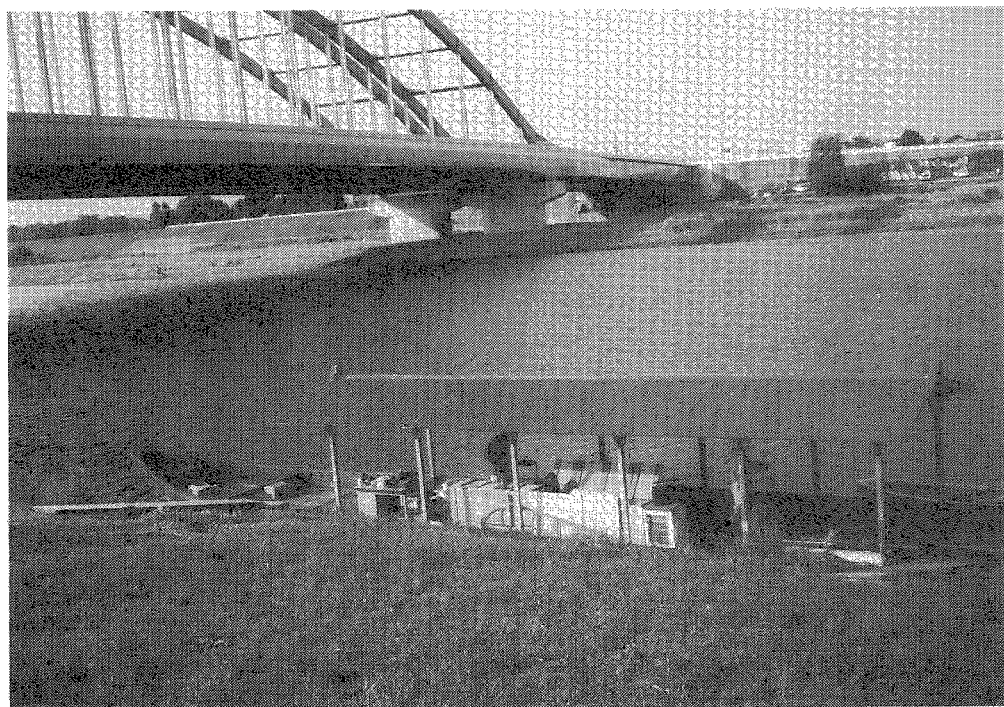
⑫ 登戸側（多摩川右岸）は流路が真直ぐで、流れが早い。（川崎市多摩区登戸新町地先）
中州の先の狛江側はワンド（入り江）になっていて、流れは穏やかだ。



⑬ 条件が悪くなり休業中の登戸側の貸ボート店の船。
(川崎市多摩区登戸新町地先)

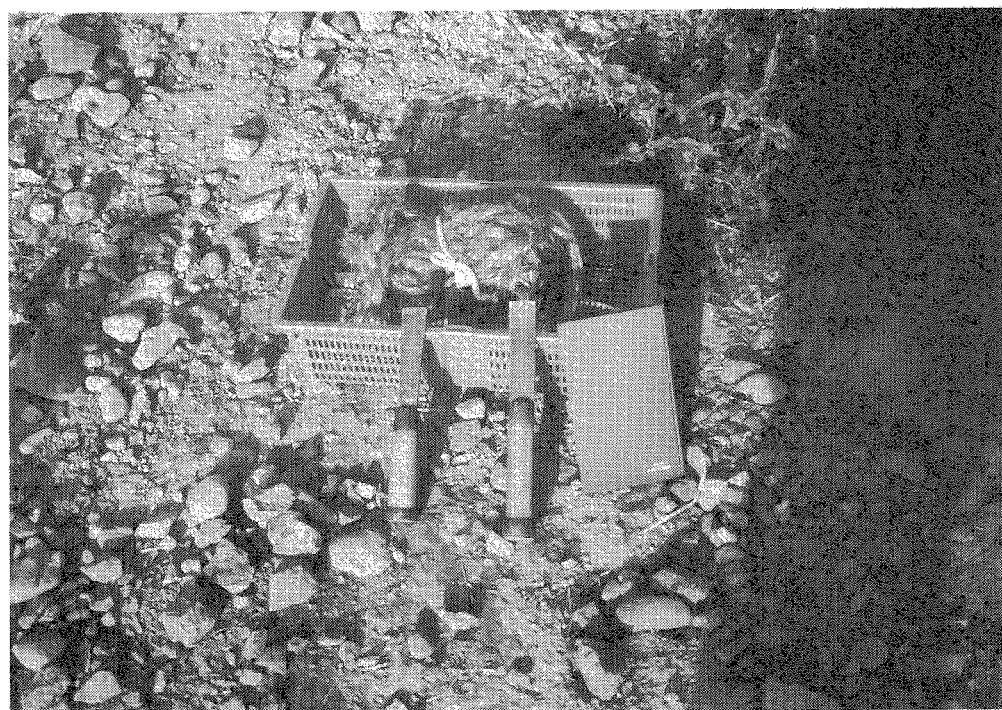


⑭ 貸ボート店は土の護岸がある300メートル程上流に移転を余儀なくされた。
(川崎市多摩区登戸新町地先)



⑮ 屋形船を台船として活用。

(川崎市多摩区登戸新町地先)



⑯ 船の中に水が浸水しないように、
板の継ぎ目に埋め込むマイハダ。樹木の繊維できている。

(川崎市多摩区登戸新町地先)



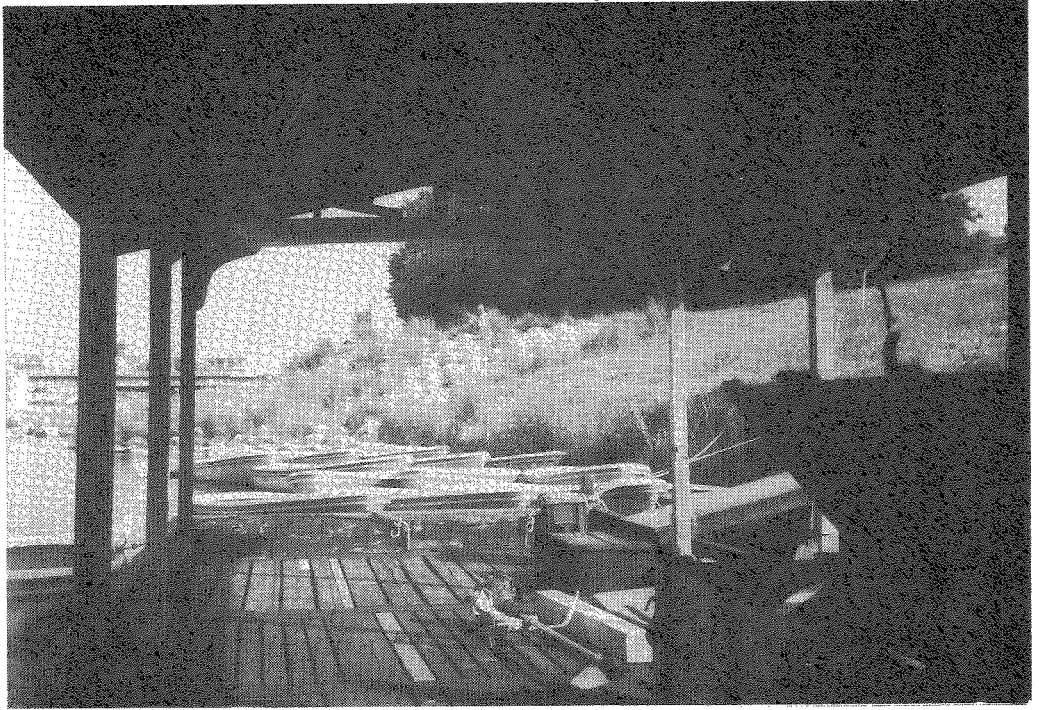
⑰ 店主自ら船を修理。
『土の護岸は自然があって良い』と語る。

(川崎市多摩区登戸新町地先)



⑱ 屋形船のオモテ（船首）側。船べりの内側には、
マツラ(補強材)が入っていることから河川の砂利を採取する船であったことを想像させる。

(川崎市多摩区登戸新町地先)



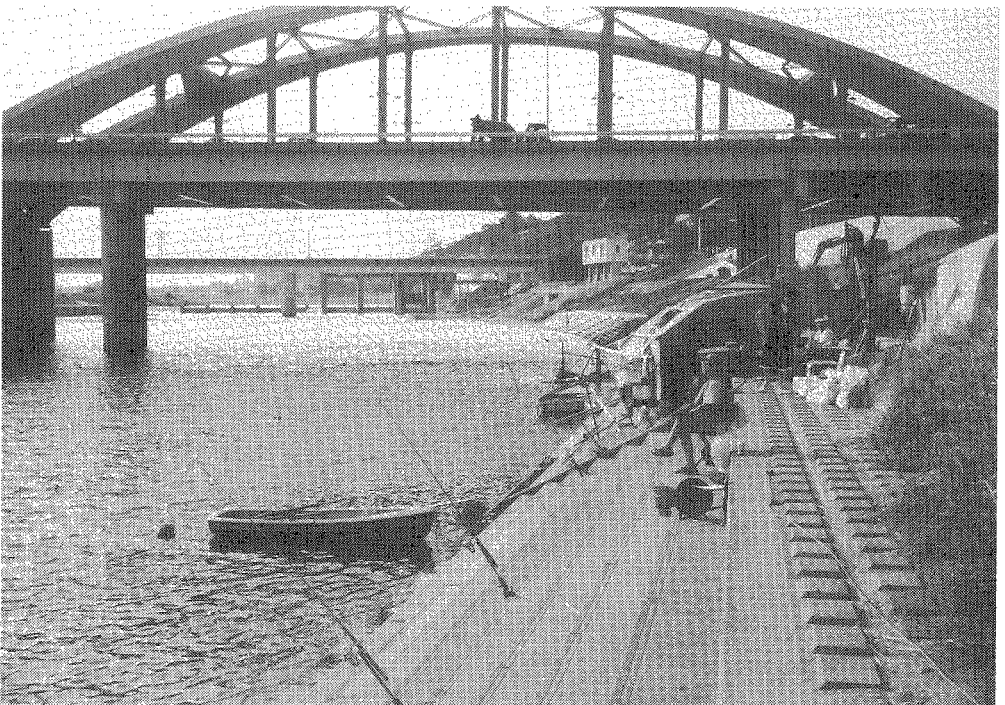
⑱ 屋形船のトモ（船尾）側を見た。
木を使った柱とハリ、屋根はトタン。

(川崎市多摩区登戸新町地先)



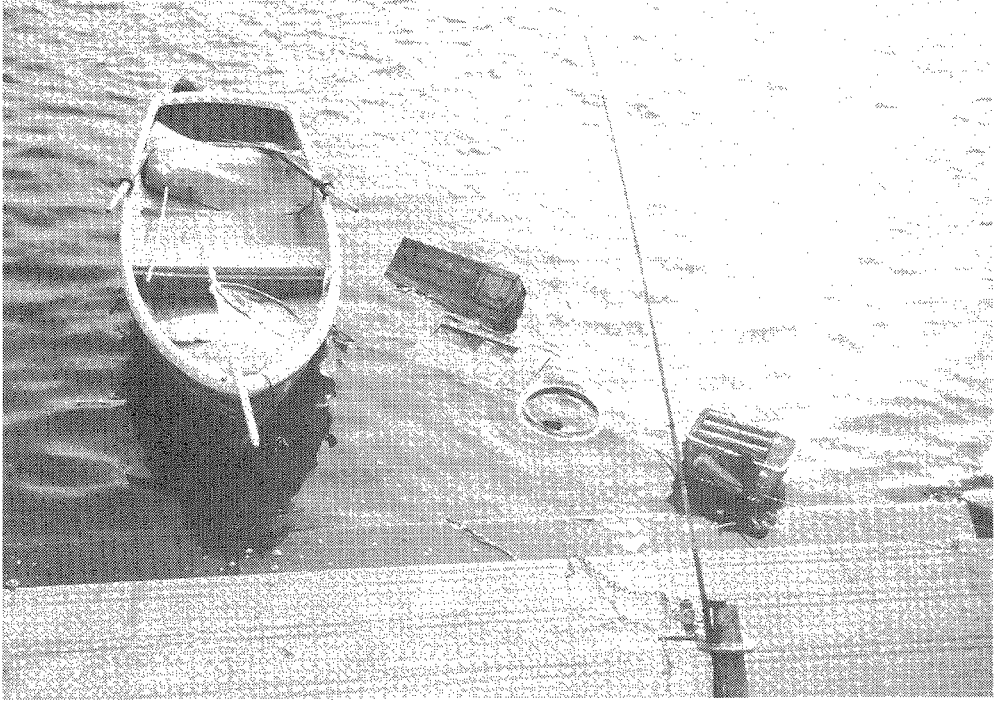
イ 東急東横線と調布堰。

(大田区田園調布地先)



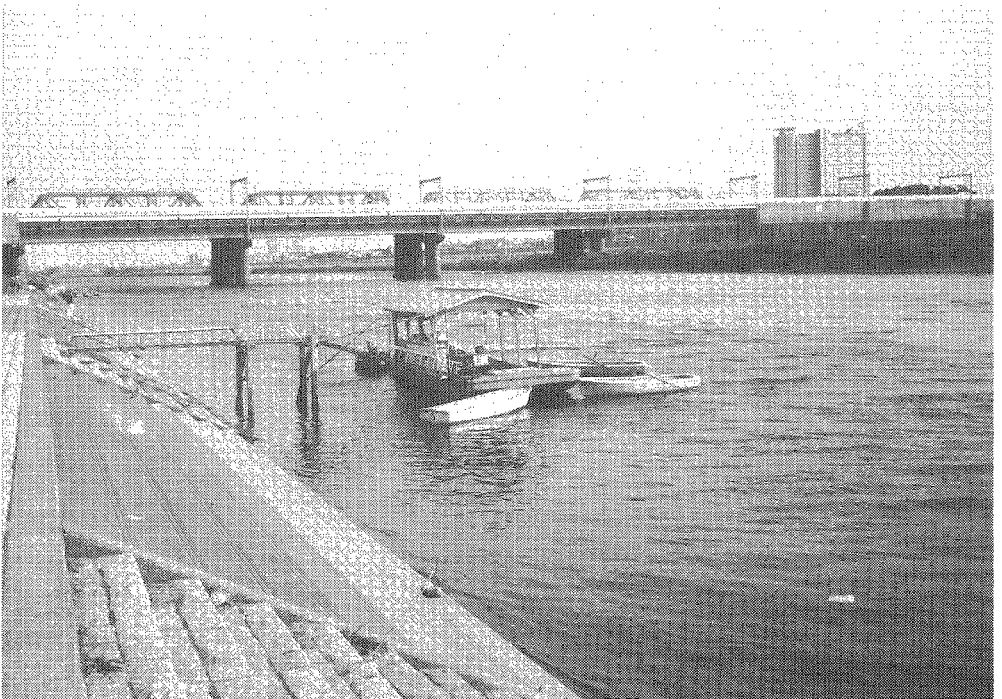
ロ 丸子橋から見た東急東横線と調布堰。

(大田区田園調布地先)



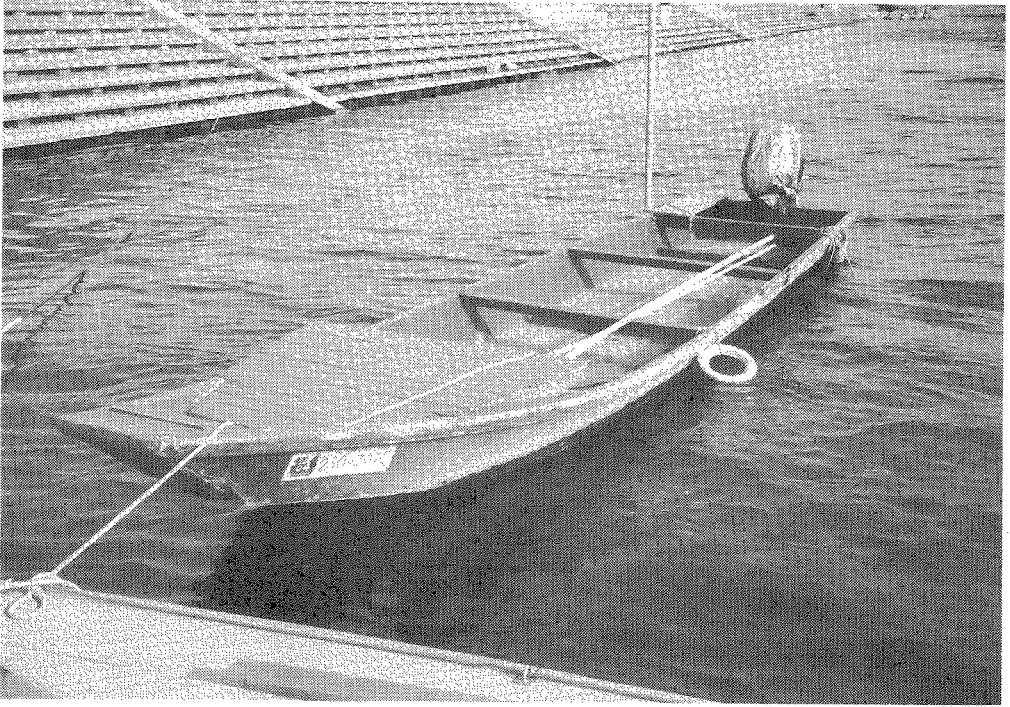
ハ 丸子橋で釣り。その日の釣果はウナギ。

(大田区田園調布地先)



ニ 丸子橋（東京側・右岸）の貸ボート店。
干満の変化に対応する栈橋と台船。

(大田区田園調布本町地先)



ホ 多摩川の漁船。 (大田区田園調布本町地先)
オモテのオドリバ (スノコ) に網師が載る。オドリバは取り外し可能。



ヘ 定置網 (稚アユを捕獲して調布堰の上流に放流する) の (大田区田園調布本町地先)
様子を見に行く漁協の組合員。



ト 丸子橋（東京側・右岸）の貸ボートも
対岸の高水敷に引き上げる。

（大田区田園調布本町地先）



ト コイなどの大物を狙う人も多い。

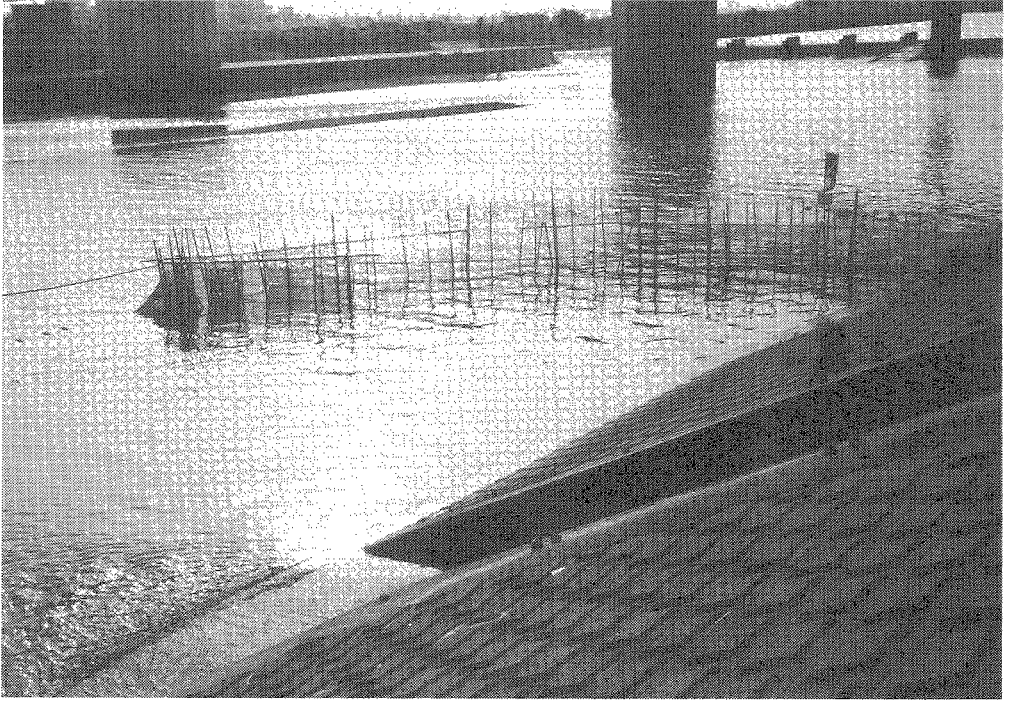


ト 丸子橋（右岸）はテトラポットもあるのでリールでブラックバスを狙う。



チ 定置網は下流に向かって伸びている。

（大田区田園調布地先）



リ 下流から見た定置網。東急東横線の橋脚と調布堰が見える。 (大田区田園調布地先)

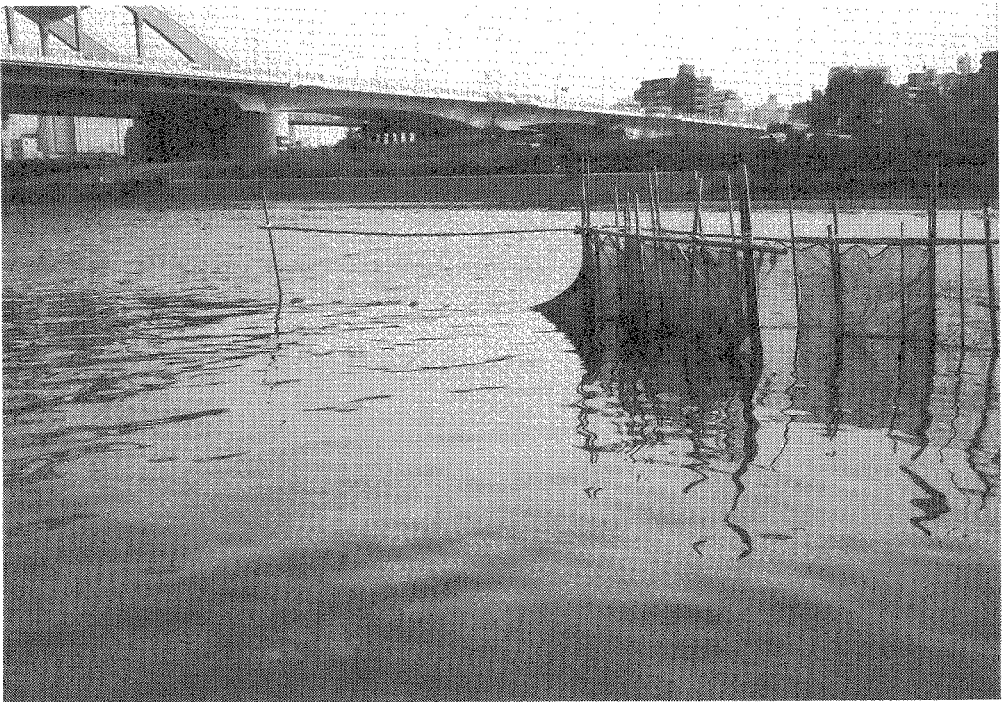


ヌ 定置網の川岸側（根元の部分）、魚を誘導する垣網となっている。 (大田区田園調布地先)



ル 定置網の前方の部分。

(大田区田園調布地先)



オ 定置網の先端は、水中に袋網が仕掛けてある。

(大田区田園調布地先)

その網の中にアユが入る。定置網は3月下旬から5月下旬に設置され、1日2、3千尾の稚アユが入り、翌朝8時半、東京都水産課に手渡される。マーキングした上で放流。



ワ ゴルフ場の防球ネットの下は淵になっており、釣り場になっている。

(大田区田園調布南地先)



カ ゴルフ場の下流側は大きな瀬が表れる。

(大田区鶴の木地先)



ヨ NECの工場と係留された漁船。(東京湾に出る)

(大田区鶴の木地先)

た ま がわ かわうおりょう ゆうりょう つりなど
「多摩川における川魚漁のあゆみと遊漁(釣等)」

(研究助成・一般研究 VOL. 22—No.124)

著 者 さき がわ こうたろう
笹 川 耕太郎
発行日 2001年3月31日
発 行 財団法人とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002
渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141
